然るに同年以降數年間は、世界的經濟恐慌時代に入り、政府も極力財政緊縮に努め、事業の繰延べ、打切り等相次ぎ、本件の如き新規事業はその例に洩れず、暫く行惱みの狀態に陷つてゐたが、本所では之に屈せず、市當局と緊密な連絡を保ちつゝ、縣當局の後援を得猛運動を繼續してゐたが、昭和八年に入り、七月十二日守屋會頭は伊藤市長と連名を以て、三度本件に關し南遞信大臣宛に建議した。

理由書（略）

この頃我國の經濟事情は稍好轉、政府の財政方針も緩和され、旁々機運漸く熟して來たので、昭和九年七月十一日、山縣會頭は、本問題の實現促進のため、床次遞信大臣竝に猪熊同省貯金局長に對し、また〳〵建議竝に陳情した。その陳情の文を次に擧げれば、

昭和九年七月十一日

遞信大臣　床次竹二郎殿

廣島商工會議所會頭　山縣元兵衛

貯金支局設置方ノ件建議

貯金支局ヲ廣島市ニ設置相成度左ニ理由ヲ具シ此段及建議候也

理由

郵便貯金、郵便振替貯金等貯金局所掌業務ハ國民經濟ノ發達ニ伴ヒ年々多キヲ加ヘツヽアリ、今之ヲ我廣島縣ニ就テ見ルニ貯金人員百十九萬四千人、貯金額九千二十五萬四千圓、振替貯金加入者七千三百人ニ達シ全國各府縣中夫々第六位、第八位及ヒ第七位ヲ占メ、其利用率中國地方五縣下中一頭地ヲ拔ケルノ狀況ナリ、而シテ廣島市ハ現ニ遞信局所在地トシテ監督行政上至便ノ地ニ當ルノミナラス、管内交通經濟ノ中心地タルヲ以テ

廣島市貯金支局ヲ設置セラレ、監督及現業ノ連絡統制ノ簡捷ト利用者ノ利便ヲ圖リ、益々文化及産業ノ發達改善ニ資セシメラレンコトヲ悃願スルモノナリ。

（貯金局長宛同文理由書略）

斯く相次ぐ猛運動に、本省に於ても漸く必要を認め、昭和十年度特別會計豫算を附議せられたる昭和九年九月六日の遞信省議において承認を受け、其後大藏省においても無事原案通過、關係諸手續を完了して、茲に愈愈廣島貯金支局の設置は確定し、地方多年の要望が實を結んだのであつた。この間中央にあつては望月圭介氏を始め縣選出代議士、野添元貯金局長其他の援助を蒙つたこと少くなかつた。

又君が廣島電氣株式會社へ寄せた好意はそのまゝ廣島縣下二百萬の縣民へ寄せたところの愛鄉精神の發露に他ならなかつた。卽ちそれについて社長鈴川貫一氏は左の如く述べられるのであつた。

「大正十年二月に廣島電氣が出來ました。會社は相當大きなもので、その當時二千五百萬圓の會社であつたのですが、水利權がないので、水力設備が洵に貧弱でした。會社としては、縣内の水力を開發して動力を豐富にして、將來産業の興隆に資さなくてはならん、それが廣島電氣の使命だ。斯う云ふ風に考へた譯です。それで廣島縣内の水利權をよく研究しまして、さうして直ちに出願したわけです。處が中々許可にならない。それは色々な政黨の關係で、色々な請願が出てゐる、卽ち競願になつてゐるので、最後にもちはぐれて了つて、どうしても許可にならない。許可のないものは仕事をするわけに行かない。さうかと云つて電氣會社として完全な動力設備が出來なくてはどうにもなりませんから、水利權を持つてゐる會社の電氣を、此方から約束して買はなければならんやうになつた。それが後の出雲電氣で、その電力を買つて開發に乘り出したのですが、その

發電所は廣島電氣の發電所ではないのですから、電氣を安くしようと思つても安く出來ません。出雲電氣との契約は、金は向ふが出して、仕事は此方がすると云ふので、その契約の著しい例を云へば、向ふが二百八十五萬圓出す事になつて、それに對して一割五分に當る金を支拂はねばなりません。さういふ狀態では會社の創立の目的たる、豐富なる電氣を起して低廉なる價格で供給し、廣島縣の產業を盛んにしようといふ目的も、木に依つて魚を求めるやうなもので、全く不可能な問題になりました。併しよく〳〵研究して見ますと、瀧山川の上流にしても、或は鄕川の方面にしても、或は太田川の上流にしても、よしや川の上流にしても、水利地點がある。開發したいと思つても皆それが競願關係になつてゐる。血を吐く思ひで年を經るうち、昭和二年でしたか田中內閣に望月さんが遞信大臣になられた時、この時に於てこの問題を解決して頂かなければ、解決して頂く時はないと考へまして、偶〻電氣局長に廣島出身の村井治郎吉君がなられたものですから、その間の事情を委しく語つた處が、始めて判つて頂けて、他處の電氣を買うて賣るといふやうな事をしてをつたのでは、廣島市を工業都市にする事も、產業都市にする事も出來ず、會社創設の使命を全うする事が出來ない。それも廣島縣に水利地點が無いといふなら兎に角、よい地點があるならやつたがよい。と、太田川、瀧山川等の上流を一括して一時に皆許可して頂いたのですが、これは全く望月さんの斷の一字でした。この許可について望月さんの云はれるのには『折角廣島に電氣會社が出來ても、水源がないといふ事ではいけないと思つたから許可をした。併し之は電氣會社に許可して貰つたと思つたら大間違ひで、之は廣島二百萬縣民の爲に許可したのであるから、この水力で開發したら、料金を安くどんな山間邊陬の處と雖も電燈を點けて文明の恩澤に與らしめ、又どし〳〵動力を低廉に供給して產業を興隆せしめるやうにしなければいかん。競願のため今日まで誰にも許可

されずにゐたのは、君達の會社の力が出來るのを、天が待つてゐたやうなものであるから、今云うたやうに會社本來の使命達成の爲に盡くさなければならん。會社だけ儲けようなど、考へたら、それこそ天罰が當るぞ。』と云はれました。これは恰度守屋前社長と私がお禮に行きました時のお言葉で、それで私達は『同じ水力でやるにしても、後になつて見て、あの時に斯ういふやうにしておけば良かつた。つまらん事をした。もつとやりやうがなかつたものか。と後からやり變へるやうな事があつては相濟まんから、誰が考へてもあの水力開發については至れり盡くせり、之以上はないと云はれるやうにせねばならん。』と、許可になつて後に大分規模を變へました。『たゞ會社が儲けるだけではいけない。』と云はれた言葉が頭の中にこびりついて居りますから、萬事その精神で行きまして、一昨年十一月、水源の開發も全部濟みましたのでその事を御報告申上げましたら、大變お喜び下さつて『君達がやつた事を見てやれるとよいが。』と云はれたのですが、たうとうあゝして亡くなられて、御覽に入れることができず、洵に遺憾に思つてゐるわけです。」（昭和十六年十月二十七日談）

尙又君が縣下に於ける他の社會經濟施設の完備とともに、教育機關の充實完備にも意を注いでゐたことは云ふを俟たない。今日の廣島高等學校の設置についても亦君の盡力に俟つ所が多いのであつた。

抑〻廣島高等學校設置の運動は、大正七年十二月原內閣の高等教育機關大擴張案發表に端を發するものであつて、偶〻その設置地につき廣島が除外せられたことより、果然これの設置運動が熊平源藏、吉村廣、長岡淸藏、海塚辰次郎、吉本正太郎氏等に依つて力强く振起せられ、縣下の輿論を喚起すると共に、東京在住の縣出身の名士を訪ねその應援を需め、且つ直接當局へ陳情することも一再ならず、奔走

盡力頗る努めた結果、遂に同校設置期成同盟會が組織され、運動に運動を重ね迂餘曲折の末、當局も亦漸うその適當を認め、茲に同校設立の確定を見るに至つたのである。今同期成同盟會作成の同校設置運動史に據れば

「本問題の中心として終始活動したる熊平源藏氏は奔命の疲れか八月以來藥餌に親まるゝ身となり而も上京委員の盡力も或は酬いらるゝの機なきかを疑はしむるものあり、旁〻一時停頓の止むなきに至りしが、越えて大正九年三月九日突如、在京望月代議士より熊平源藏氏宛廣島高等學校設置案閣議に於て決定せし旨打電せらる。越えて三月十日內務部長より更に知事宛左記の通り打電。縣民の要望愈〻實現することとなれり。云々。」

とある。

然して同校敷地は翌十年七月市內皆實町地內候補地に決定。翌々十三年四月より開校さるゝに至つたものである。

尙ほ君は前年度に引つゞき第二次幹事長として縱橫の活躍をなしつゝあつた時である。然も自黨の內閣ではあり、縣下教育機關の完備を希ふ君として、必ずやその設置確定に努力したる事は云ふを俟たぬ處であらう。

かく縣內の圓滿發展を希望する君は、偶〻縣下の紛糾を聞くと、頗る不機嫌であつたといふ。遠くそれを憂慮する狀態は、さながら親として子の爭ひを見るが如くであつたといはれてゐる。君が縣下のさうした社會的個人的な紛糾を調停し、之を圓滿解決に導いた例は、決して數度に止まらないが、今その

最も喧傳された事件について述べるとしよう。

その一つは「瓦電騷動」と稱される廣島瓦斯電軌株式會社々內に於ける大紛擾であるが、それについて同社現社長山口吾一氏より、左の如き一文を寄せられたので全文を左に掲載する。

紛擾事件ニ就テ望月先生ヲ想フ

廣島瓦斯電軌株式會社ノ、其前身廣島瓦斯株式會社ガ明治四十二年十月、資本金百五拾萬圓ヲ以テ呱々ノ聲ヲ擧ゲ、同四十三年十月尾道瓦斯株式會社ヲ、大正二年八月吳瓦斯株式會社ヲ、更ニ大正六年三月廣島電氣軌道株式會社ヲ各合併シテ、社名ヲ現在ノ廣島瓦斯電軌株式會社ト改稱シ、爾來數度ノ增資ニ依リ、現在資本金壹千貳百五拾萬圓ニ達シ、廣島、吳、尾道、三原ノ諸市及附近町村ニ瓦斯ヲ供給シ、一方製司コークスノ製造販賣、廣島市內及廣島宮島間ノ電鐵事業、竝ニ廣島市內近郊ノ自動車事業ヲ經營シ、爾來內容ノ堅實ナル地方稀ニ見ルトコロナリト自負スルト共ニ、事業ノ公益性ニ於テ時局下邦家ノ爲ニ一臂ノ貢獻ヲ爲シ得ルハ、寔ニ欣幸トスル所デアリマスガ、顧ミテ如斯隆昌發展ヲ齎スニ至ル迄ノ過程ニ於テ、所謂受難時代經營ノ任ニ當リタル多クノ人々ノ並々ナラヌ苦心ヲ拂ハレタ賜ナルコトヲ思フトキ、是等ノ先人ニ對シ限リナキ感謝ヲ禁ジ得ザルモノガアリマス。

就中大正十一年財界不況時ニ於テ經營難ニ原因シ、重役ト有力株主間ニ意見ノ對立ヲ見、一大紛擾ヲ惹起シ、約一ケ年ノ久シキニ亙リ紛爭ヲ繼續シ、延イテハ鄕土ノ財界ハ勿論、其ノ渦中ニ投ジタ多數關係者ノ受クル影響ハ眞ニ甚大ナルモノガアリ、之ガ爲メ監督官廳ハ勿論、時ノ加藤(友)總理大臣ヲ初メ、前田逓信大臣、村上、

船越兩男爵等ニマデ實ニ容易ナラヌ御心勞ヲ懸ケタ次第デアリマス。其際先輩望月先生ハ深ク之ヲ遺憾トセラレ、專ラ兩者ノ間ニ立チ、寢食ヲ忘レテ之ガ調停ヲ計リ、サシモノ紛議モ遂ニ圓滿解決ヲ告ゲ、吾人共ニ愁眉ヲ開キ、社業ヲ廓清シタル一事ハ當社今日ノ盛業ノ素地ヲ成シ得タト云フモ敢テ過言デハナカラウカト思フト同時ニ、先生ノ如何ニ威德ノ高ク溫情ノ人格者デアラレタカヲ思フ時、自ラ敬慕ト感謝ノ念ヲ一層深クスルモノデ、以下當時ノ紛擾ノ一端ヲ敍シテ、先生ノ高德ヲ偲ビ度イト思ヒマス。

大正十一年。時ノ社長松浦泰次郎氏ハ財界不振ニ際會シ、シカモ阿賀製司コークス工場ハ建設早々ノ事トテ業績擧ラズ、加フルニ宮島線電車又巨額ノ建設費ヲ要シ、其收入亦意ノ如クナラズ、會社ノ經營ニ日夜苦心シ難局打開ニ日モ亦足ラヌ有樣デアリマシタ。

偶々大正十一年二月、有價證券所有等ヲ目的トスル定款變更ヲ本店所在地ニアラザル東京市ニ於テ開會シタコトガ有力株主ノ反對ヲ買ヒ、株主總會無效訴訟ガ提起セラレマシタ。元來コノ本店所在地外ノ株主總會ノ有効無効ノ問題ハ、學者間ニモ議論ガアツテ定說ナキニヨリ、法曹會ハ此判決ニ異常ノ關心ヲ注イダノデアリマシタガ、終局判決ヲ見ズニ了ヲ告ゲタレドモ、昨年商法ノ改正實施ニヨリ總會開催地ヲ明確ニセラレタノモ畢竟如斯紛擾ガ遠因トナツタコト、推察セラル、次第デアリマス。

閑話休題。コノ對立關係ノ未ダ解消ニ至ラヌ同年八月松浦社長ハ自家電力ノ確保ト餘剩電力ノ販賣ニ着目シテ、當時神戸ノ鈴木財閥ガ廣島縣太田川ノ水利權ヲ獲得シ、資本金七拾五萬圓ヲ以テ創立セル太田川水力電氣株式會社ヲ、吾社ト合併セントシテ之ヲ株主總會ニ提案セルトコロ、此不況時ニ工事未着手ノ利權會社ト合併スルコトハ、彼ニ利益多ク吾社ノ失フトコロ大ニシテ其基礎ヲ不安ナラシムルモノナリトテ、有力株主ノ反對ハ更

ニ火ニ油ヲ注イダ形トナリ、兩者ハ自己ノ主張貫徹ノタメ、因緣關係ヲ辿リ株式委任狀ノ蒐集爭奪トナリ、其株數相伯仲シタノデ總會ハ俄然緊張殺氣ヲ帶ビ、出入ノ株主ハ一々訊問ヲ受ケ、壯士ハ兇器ヲ撫シテ反對派株主ヲ抑壓セントシ、場內ハ喧囂ヲ極メ、形勢ハ刻々險惡化シ、遂ニ反對派株主ノ締出シヨリ流血ノ慘ヲ出シ、檢察官ノ臨檢ヲ見ルニ至リ、總會ハ長時間ヲ要シ、辛ジテ合併可決ノ形式ヲ採リ得タルモ、前後シテ總會ノ無効訴訟トナリ刑事問題ヲ派生シ、更ニ重役解任ノ株式總會開會ノ要求等相次デ起リ、利害ノ衝突感情ノ激化面目問題等愈々深刻化シ、之ガ抗爭何レノ日ニカ終熄シ兩者ノ融和ヲ見ルヲ得ベキ乎、殆ド絕望狀態ニ陷リ、廣陵財界ノ天地ハ暗雲低迷其及ボス影響盡シ甚シキモノガアリマシタ。

此時ニ於テ我望月先生ハ、コノ紛擾ヲ其儘放任センカ、地方財界ニ止ラズ國家的損失ナリトシ、双方ノ主張ヲ聽キ、狀況ヲ詳サニ檢討セラレ、東奔西走其ノ解決ニ非常ナル苦心ヲセラレタル結果、盤根錯綜セルコノ難問題モ遂ニ大正十二年初春圓滿手打トナリ、松浦社長ハ退任シテ松本勝太郎氏後任社長ニ、革新派ヨリ三宅兼一氏副社長ニ其他倉田信太郎氏等取締役トナルニ及ビ、一箇年餘ノ紛擾モ大團圓トナリマシタ。

吾人ハ其紛爭ノ是非何レニアルカヲ論評セントスルモノデハナク、唯世ニ之ヲ瓦電紛擾事件ト稱シ、今尙ホ人ノ話頭ニ上ルコト屢ミナリト雖モ、而モ先輩望月先生ガ比ノ紛擾解決ニ苦心セラレタコトヲ知ル者ハ至ツテ僅少デアリマス。今之ヲ回顧スレバ已ニ二十餘年ノ歲月ヲ閱シ、當時ノ關係者中鬼籍ニ入レル者モ亦少カラズ、因テ茲ニ古キ記錄ニヨリ之ヲ概說シテ、先生ノ高德ヲ稱セント欲スルモノデアリマス。

先生モトヨリ其志天下國家ニ在リ、其勳功亦又著大。如斯ハ一小些事ニ過ギナイガ鄕土愛ノ片鱗ヲ窺フモ亦アナガチ徒事ナラズト信ジ、敢テ江湖ニ紹介スル次第デアリマス。

今一つは廣島市商業會議所々内に於ける紛糾事件にて、時は昭和八年秋、會頭山縣氏、副會頭山崎氏兩派の軋轢の激化したものである。この紛擾は頗る深刻なるものがあり、會頭は副會頭派より、職權濫用、印鑑盜用等の告訴を受くるなど、抗爭三月に至るもその紛糾は息む處を知らなかつた。其の時、同じく之を憂慮する周圍の人々より、鄕土の大先輩として其の紛糾調停を依頼されたる君は、岡山市に於ける政友會中國四國大會に臨んだ後、十一月二十六日廣島に赴きその調停に立つた。君の調停法はいつの場合でも決して當事者双方についてその是非を云はなかつた。唯大局を說き反省を求めるのみであつたが、君の大いなる誠實、自らなる人德によつて、常に事件は圓滿解決を見るのであつた。

此の會議所問題の場合もさうであつて、さしも揉みに揉んだ紛糾も、遂に圓滿なる解決を見るに至つたのであるが、それについて、君が廣島到着の翌日、廣島市商業會議所講堂に於て述べた挨拶の一節を、藝備日々新聞から左へ轉載して、君の調停法の一端とその壽力を窺ふこととする。

「今日世界列强と日本との關係を考へて見ると、非常に難しい時局に遭遇してゐると云へる。例へばロンドンでの經濟會議を見ても、何等の決議も申し合せも出來てをらぬ。何故ならば、集つた六十餘國は自國の目前の利害に捉はれ、百鬼夜行の形相である。博愛仁義共存は口の先でその心中を思へば肌に粟を生ずる有樣である。(中略)また一昨年から昨年にかけて爲替が二倍半も騰貴して物が高くなつた。當り前ならば其處此處に暴動が起るのが、世界各國の現狀であるが、日本には經濟學者らの稱へたやうな事實は起らなかつた。こゝに日本の大

きな特徵がある。勿論世界に比較すれば一長一短はあるであらう。しかしわが皇國には、いかなる金を積むとも購へぬ、二つの大きな事實の存在がある。一つは日本帝室と國民との麗しい關係である。今一つは家族制度である。日本軍の强さはこの家族制度にある。この望月が非國民的行爲、不信を敢てしたとすれば、祖先の名を汚し、子孫にまで恥辱を曝す。だから生れた大崎島にも居れぬ。と云つて他處に行つたとて安穩には暮せぬ。この完全な家族制度の精神で行けば、十に對する七であつても、個人主義の歐米に對抗することが出來る。(中略)今後十年間一致して非常時克服に邁進すれば、必ず世界に於ける第一の强き國となり得る。一致結束なくて今後の國運開拓は絕對に見込みがない。私も及ばずながら、お互に助け合つて行く爲なら、縣の望月でいゝ。天下の望月たらんとするやうな名譽欲など微塵もない。邦家の爲に飽迄も盡す考へである。(中略)極端なる人身攻擊は、只さへ人材拂底の折柄、誠に悲しいことである。今はお互がお互を殺し合ふべき時ではない。血眼になつて會議所會頭問題を爭ふは、あまりに小さくはないか。どうかいゝ加減に紛糾を斷つて、仲よく鄕土の爲、邦家の爲に盡くされたい。」

この挨拶には實によく君の精神が現れてゐる。卽ち　皇室に對し奉る尊崇、家名に對する恭愼、鄕土に對する愛情、他人に對する寬恕等の精神が、平俗な言葉の中に遺憾なく流露してゐる。然もその言葉の癖、所謂君の型さへも實によく現れてゐるではないか。

それはさておき、縣下一般の福利施設に對してさへ、斯くの如く積極的な愛情を以て臨んだ君であつて見れば、況んやその生地たる大崎島へ對する熱情は、君の社會的地位が高まるに正比例して、愈〻そ

の愛鄉精神は深まつて行つた。もとより之は鄉土へ對する自己の誇示ではない。それはむしろ一種の報恩とも見られるほど、純粹な愛情の發露であつた。

大崎島へ與へた君の福利施設には、まづ父の遺業とも云へる商船學校の國立移管、電燈電話の架設、東野村郵便局の昇格、又は道路の改修等、その愛鄉施設は洵に並々ならぬものがあるのであつた。

まづ商船學校國立移管問題につき同校教授蒔田逸司氏は左の如く語られるのであつた。

「明治三十三年十二月廣島縣會に於て本校を設立する事が可決されまして、翌四十四年四月縣立となり、校名を廣島縣商船學校と改めました　而して六月之を廣島縣立商船學校と改稱いたしました。

商船學校卒業生には、二等運轉手又は二等機關士の免狀が交附せられる。之等卒業生が一等運轉手か一等機關士の免狀を獲得したいと思つても、商船學校の普通學科の程度が低いため試驗が難しい。そこで何とか對策を講じなければならぬといふ議論が、識者の間に起つて來た。

當時中央に圭介氏あり、地方には乙也氏がありまして、斯かる場合には非常に好都合でした。乙也氏の如きは、議長でない場合でも議長以上の勢力がありました。そこでこの兄弟と山道氏が協力して、運動が開始された譯です。それは東京及び神戸の高等商船に別科を設置する事でした。こゝへ入學するには、技術の試驗のみで、普通學科の試驗は課さない。修學期間一ケ年で、此所にて一等運轉士、機關士の試驗を受くるに足る丈の教育を補充する。入學資格は船長機關長二等運轉士機關士です。此の運動には主として望月氏の御兄弟があたられた。

成績の點では、縣立では廣島縣立商船がトップと云ふ事は自他共に認めてゐました。それと云ふのも、望月氏が中央方面にあつて、歷代校長の人選に力を致された爲であります。

昭和十三年八月全國の縣立商船學校の整理廢合の議が中央で起りました。十二月になりまして、四校のみ國立に移管する旨決定せられたと云ふ事が突然新聞に依り報道されました。これは正に寢耳に水とでも申しますか、この時になつて甫めて縣當局もそれと知り、狼狽した中村學務部長は、直ちに乙也氏、縣知事竝に總務部長と相談した結果、本縣商船學校も國營に移管しなければならぬと決議しました。政府案に據りますと、他の縣立四校は遞信省管下の海員養成所に成る予定でした。政府案の基礎的理由は、商船學校を全國的に分散させる目的であつたと思はれます。然し乍ら全國商船學校中の白眉たる本校を海員養成所の如きものに格を引下げる理由を見出し得ぬと縣民の心穩かならぬものがありましたし、縣當局としましても、若し政府が縣民の意志に反して、本案を實施するなら、依然本校を縣立の儘にしておく積りだと、竊かに決心の臍をきめまして、學務部長上京の機會に絕對反對の意志を政府當局に表明致しました。

然し乍ら今更文部省も意志を飜す譯には行きませんでした。斯くして双方の主張は正面衝突と云ふ最惡の狀態に立至りました。此の間、他の四校は豫定通り昭和十四年八月に國立に移管されました。先年十二月學務部長は上京の際圭介氏に運動を依賴しました。そこで圭介氏は八方奔走されましたが、十四年度には到底實現の曙光を望み得ませんでした。同じ悲運に慨く他の三校の中、岡山縣立商船學校のみは縣の豫算上受諾せざるを得ぬ事情にありましたが、殘る二校も本校の强硬態度に共感致しまして、本校の國立移管運動に協力する事となりました。中央では圭介氏の盡力で各縣代議士中より委員を選拔致し、事務所を特に設けて激烈なる運動を

開始しました。此の問題は文部・遞信・海軍の三省に跨る所の甚だ複雜な事情にありました。十三年度の議會の問題となりましたが、越えて十四年度の議會にも再提出されました。然し議會での情勢は甚だ不利で、殆ど絶望視されました。圭介氏を中心とする委員連の活躍と相俟つて、關係校長も皆上京致し、各方面に當つた結果は、二省のみは意思變更の見込ありとしても、唯某省のみが頑として動かぬと云ふ事が判明したのでした。これには或る事情が伏在してゐまして、先づ動かし難い存在でありました。事務的には絶望だと知つた校長連は、此の上は政治的解決を望月氏に依頼する外なしと覺悟を決めまして、時恰も議會開會中でしたが、山道氏を通じて望月氏に此の旨を傳へました。望月・山道・村上紋四郎竝に三土忠造の諸氏が米内首相に膝詰談判をなさつた結果は、唯確言出來ぬと云ふ覺束ない返事でした。ところがその翌日の午後局長會議が開催されまして、三校の國立移管が内定されました。續いてその日の夜次官會議が開催され、其の後閣議を通過しまして、此處に國立移管が決定されました。望月氏以下夥多の關係者が日夜を分たず寢食を忘れて奔走に寧日のなかつた努力は終ひに報いられまして、一時は絶望視されました遺の難問題もこゝに漸く解決の悦びを得たのでした。

昨年五月内閣參議として歸島されました時、本校で講演して下さいましたが、本校國立移管問題に言及され、移管に際しては非常な困難に遭遇し、正に血を流さんとする所迄行つたと洩らされました。翌日私は先生の邸宅に挨拶に伺ひまして、『昨日の閣下御講演中に、正に血を流さんとする所迄行つたと仰言いましたが、私達は遠隔の土地にゐまして、當事の逼迫した事情を知る事が出來ませず、遺憾に思つてゐますが、當時の事情を片鱗でも御洩らし下さいませんか。』と御願ひしますと、『さう云ふ事をあなた方が聞いても何にもならぬ。たゞ關係者を刺戟する丈だ。あなた方は、當路者が熱を入れて奔走したと云ふ事のみ知つてをればよい。』と云はれま

した。此の問題の解決も、結局先生が政派を超越して多數の同志をもつてをられた爲だと思ひます。斯くて十五年七月廣島・粟島竝に弓削の三商船は官立となりました。」（昭和十六年六月二十五日談）

又同問題及び電燈電話電信の架設につき、望月有正氏も亦、左の如く語られるのであつた。

「この商船學校が縣立から官立に移管されました時は、非常な困難が伴つたのですが、父君東之助氏の殘された公共事業に、圭介氏が有終の美を飾るやうに人からも奬められ、又當事者や島民からも懇願されて、非常な努力を以て奔走されました。斯くて漸く官立移管に決定いたし、父の遺業は子に依つて完成されたのです。官立移管問題は昭和十二年に始まり十四年に終りました。設立當時の生徒の數は百名で航海科のみでしたが、その後五六年して機關科が設けられました。この科は五六十名收容しました。とにかく全國商船學校中もつとも成績の良かつたこの學校が、官立どころか遞信省管下の海員養成所に顚落しようとする、島のみならず廣島縣としても、寔に重大な危機に當面してゐたのです。縣として最後の頼みの綱は圭介氏でありました。圭介氏もその陳情の正當な事を理解して下され、よく盡力斡旋して下さいました。又圭介氏が此島に與へられた最大の恩惠の一つは、この瀬戸内海の邊鄙な孤島に、電燈のみならず、電信電話を敷設するやうに努力された事です。即ち圭介氏の遞相時代で、昭和二年に許可されました。海底電線敷設費金額中十七萬數千圓を政府が負擔し、殘餘七萬圓を村より出す事となりました。」（昭和十六年六月二十四日談）

更に又蒔田逸司氏も同問題につき次の如く語られた。

「この島に遺された先生の恩惠は非常なもので、その尤なるものは電燈電話の施設であります。それまではこの島は洋燈のみでありました。海底電線敷設の時は本校の端艇を使用いたしました。これは先生の遞相時代で

あります。其他重要なことは、東野村の郵便局は從來集配局でしたが、これを郵便局に昇格して下さつたことなどであります。」

（昭和十六年六月二十五日談）

以上述べた如く鄉土へ對するその福利施設については、まつたく至れり盡せりであつたが、又精神的方面に關しても、常に之を善導することを忘れなかつた。

君は縣下の諸教育團體の會合には、能ふ限り出席して、懇切に之を教導した。君は努めて若い男女の學生と談じ、自己の多年の經驗を以て、彼等の修養の一端に役立たせたく思つてゐた。君が如何に鄉黨後進の指導に盡したかは、先に「性格」の章に掲げた大妻コタカ女史の談話に於てもよく窺へるところであるが、更に、横山金太郎氏も左の如く語られるのであつた。

「又先達て我縣の育英機關と藝備協會が記念の會を催しました時に、望月氏は態々そこへお出で下さつて、誠に御親切な演說をして下さいました。政界に馳驅するお方は非常にお忙しいものであるから、學界の方とか或は同縣の學生の世話とかいふことまでには、心に思つてゐても中々實行困難なものであります。藝備協會の世話をしてゐる私共としては衷心より感謝に堪へない次第であります。」（昭和十六年二月四日談）

更に鄉土大崎島に對してはより一層の力を注いだ。即ち東野村國民學校々長倉本正氏は、

「昨年展墓に御歸鄉の折、正光房に於きまして、女學校、本校高等科の生徒全部に講演して頂きました。平生信仰に厚い先生はやはり「信仰について」と題されてお話し下さいました。又本校に二宮金次郎の銅像を寄贈して下さいましたが、これは特に上田直次氏に製作を依囑された立派なものです。又天盃をも御寄贈下さいま

した。」（昭和十六年六月二十八日談）

と語られ、又望月有正氏は、

「圭介氏は、常に嘘を云はぬ事、正直でなければならぬといふ事を、みんなに口を酸つぱくして云ひ聞かせられたものです。」（昭和十六年六月二十四日談）

此處まで來れば最早それは、鄉黨への教訓といふよりは、正に家族へ對する教訓であつた。

まつたく君の島民に對する愛情は、家族へ對する愛情であつた。

それについて倉本正氏の回想を聽かう。

「先生は極めて敬老の念が厚く、老人達を迎も勞はれました。何時でしたか、歸島されました時、學校で大歡迎會が開かれましたが、折詰の蓋を一寸取られて、すぐそれを傍の者へ『これをお婆さんへ遣つてくれ。』と仰有つてお遣りになりました。その溫いお心に、並居る者は深く感動いたしました。先生が去年歸島されました時、敬老の意味で金一封を下さいましたので、この金で、婦人會主催の下に、十一月三日明治節の佳日に敬老會が開かれました。

又先生の細いお心遣ひを立證する逸話があります。それは長き邊りより先生に御下賜あらせられた金盃を、これは私すべきものではないと、本校へ下さいましたが、當時の村長のみが乾盃して、外の者が恐懼して之を戴かないのを見て、『それはいけない、皆もおうけしろ。』とて全部の人々に乾盃を奬められました。」

（昭和十六年六月二十八日談）

又同く乙也氏夫人も左のやうに想ひ出を洩らされるのであつた。

「圭介兄が歸つてまゐりますと、上下大崎八十歳以上の年寄の方の全部に、お土産として金一封を贈るため、一々その包み紙の上に、自ら筆を執つて姓名を書いてゐました。それには敬老の意味もありましたが又『かうして年寄を敬つておくと、あなた方によいこともあらうから。』といふ優しい細い心遣ひもその理由の一つでした。『祖父や父がかうして人にようしてやつてゐたのが、儂がかうなつた所以だ。』と申してをりました。何時でしたか忘れましたが、『積善の家に餘慶あり』といふ額を書いて兄に贈られた方もありました。」

（昭和十六年六月二十七日談）

右の談話の中にある、「祖父や父の善行の報いに依つて自分は斯く世に出た。故に自分の善行も亦後の人に廻つてくるであらう。」といふ君の言葉は、或は功利的な意味に解釋されるかも知れない。又君自身、善因善果、惡因惡果の原始的因果法を絶對法則として信じる人である以上、一層さうした意味に解釋されさうである。その解釋は如何にあれ、唯よく知つておかねばならぬことは、君にとつて、それはあくまで無私の行爲であつたといふことである。卽ち君にとつて善因善果を希ふ行爲は、社會的義務であつたのである。君にとつてはたゞ我家のみでなく、すべての家が積善の家でなければならなかつたのである。君が常に無私奉公を叫ぶのもそれである。人間は無私奉公に至つて初めて正しく強い。そこに積善の家が興り、積善の鄕が起り積善の國が起る。日本が萬邦無比の正しく強い國家となるためには、各家

が悉く積善の家たらねばならぬといふのが君の理想であつたのである。

又一體に物慾に恬淡であつた君が、その鄕黨に對して一層甚しかつたといふことは、既に家業の章にて述べた磐城の石灰山を廉價に讓らんとした話など、そのよき一例であるが、更に望月吉太郎氏は左の如くそれにつけての記憶を語られた。

「現在の私の造船所の敷地は、大望月の隱居所の跡ですが、閣下が私に無償で貸して下さつてゐるものです。」

（昭和十六年六月二十五日談）

此の如く島の人々は君の家族であり、島は君の家そのものであつた。それについて望月有正氏は、

「圭介氏が最後に歸鄕されました時、『この島へ歸ると、親の家にでも歸つたやうなものだ。』と泌々述懷されました。心なしかそのお言葉の中に淋しい翳が窺はれまして、これがお別れになるのではないかと、不吉な豫感さへ覺えたのでありました。『閣下は國家の爲に大切なお人ですから、お躰を大切になさらなければいけません。』と申上げますと『有難う。あんたも用心せえ、儂も用心する。』と申されましたが、これがお目にかゝつた最後でした。其後福山で大分お躰を無理されたやうでしたが、軈て東京へ歸られてから躰の工合が惡くなられたと聞きました。何でもこれからは質素にしなければならぬと、横濱のお孃さんのお宅へ電車で行かれ、その爲すでに弱つてゐた躰に無理が入つて、風邪を引かれたといふことを聞きました。」（昭和十六年六月二十四日談）

此の如く鄕土へ對してひたむきな愛情を寄せてゐた君は、又從つて鄕黨へ對する信賴の念も頗る强か

つた。云はばそれは天下を擧げて自分に叛くも、鄕黨だけは自分を信じ、自分を支持してくれるであらうといふ底の信賴であつた。そこにも一徹な感激家の君の面目が、よく現れてゐると思ふが、鄕黨とのさうした美しい心の交流は、何に於いて最もよく發露せられたかと云へば、それは云ふまでもなく選擧に於いてであつた。かうしたことは政治家としても洵に稀有なる事であり、たゞ誠實なる政治家にのみ、與へられたるところの祝福であらうと思ふ。それについて柴田重輝氏が述懷されるところを聽かう。

「私が先生と相識つたのは三十年も前のことで、主として選擧について接觸してまいりました。最後の四回は私が選擧事務長でした。選擧の時は、私達の云ふことに絶對に服從されました。これはまつたくあのやうな豪い人でなくては出來ないことゝ思ひます。ですから私達は非常にやり易すかつたが、たゞ運動が地盤以外に伸びると叱られました。これは先生は御自分の選擧區を豐田賀茂の二郡として、政見演說もこの兩郡以外にはやらないのです。(然しその選擧區へも多忙のため、一度も歸らなかつたことが四五回はあります。私の事務長の時にも二回ばかりありました。)ですから廣島市、吳市、安藝郡などで演說する事があつても、それは同志の爲の應援演說で、決して自分の爲に演說會を開くといふやうなことはありません。例へば吳市へ應援演說に行つた時の話しぶりなどを申しますと『私に投票してくれる人もあらう。しかし私は長い間の政治生活で、諸君の有形無形の御後援を得てゐるから、何とか當選はしませうわい。どうか私に入れてくれると思つて、渡邊伍(アツム)にやつて下さい。私へ入れて貰うても、正直のところ私はさう喜びません。』と斯ういふ工合に話されるので、み

んな非常に感動を受けるのでした。それで票は渡邊さんに行きましたが、やはり先生にも吳市だけで七八百票はあつまりました。

選擧の演說回數の記錄は、前々回か其前の選擧の時で、一日十八回といふのが最高記錄です。先生が廣島縣、特に地盤とされた選擧區へ對する誠意の厚かつたことは非常なものですが、選擧の時にもさうした性格の一端が實によく現れる事がありました。例へば或時、それは非常に大雪の降る日でしたが、賀茂郡の東高屋村から白市の會場へ到着したのは午前二時でした。それでも聽衆は百人から詰めてゐました。此の地方で百人から聽衆が集るといふのは平日でも他にはないことなのですが、それが大雪の夜、然も午前二時といふ夜中に、それだけの人が先生を待つてゐると云ふことは、いかに選擧民達が先生に對して深い敬愛の念を寄せてゐるかゞわかると思ひます。この時は私も同伴いたしたのですが、あまりの大雪なので、別に選擧の模樣が危險といふわけではないのですから、東高屋村へ泊らうと云つて慫めたのですが、先生は『いや、今夜八時の豫定が伸びたのだが、聽衆はきつと待つてゐてくれる。聽衆に待ち呆けを食はしては濟まん。何時になつても行く。』と云つて出發せられたのです。到着して見れば今お話したやうに、百人からの聽衆が寒さに顫へながら待つてゐたので、先生はすつかり感激して、疲れも何も忘れて深夜に熱辯を振はれたのでした。まつたくその夜の光景は何と申さうか美しいものでした。」(昭和十七年五月十九日談)

此の如く鄕黨を信じる君には又次の如き逸話も生れた。卽ち『藝備の友』(昭和二年五月號)に揭載の「遞信大臣望月圭介氏を論ず」の末節に、

「彼は鄕土を愛する事に熱心である。祕書官に宮澤裕氏を擧げたのも鄕土愛から出たに相違ない。宮澤は法學

土にして廣島縣人である。小川鐵道大臣のむこである。元來ならば島居哲氏が望月氏の祕書官となるべく豫約があつたやうであるが、これが小川鐵相のむこたる人とかわつた處に興味があると思ふ。故加藤友三郎氏にしても、早速整爾氏にしても、祕書官に廣島縣人を用ひぬ爲に、廣島縣人との連絡が頗る薄かつたが、縣人登用の第一歩として、宮澤を拔いて祕書官としたのは、全く縣人との連絡を保たんとするの趣旨と思ひ、愉快に感ずる次第である。」

と述べてゐる。

又君が如何に鄕土の人を信じ、事を慮り、物を愛したかと云ふことについて、山口吾一氏は左の如く語られた。

「私は會議所の議員を二十一年ぶッ通しでやつて居りますから、一番古參でせうが、望月先生の處へはズッと行つて居りますが、自分の私用で行つた事は事は殆どなく、常に鄕土の問題ばかりを賴みに行つて居りますが、お說のやうに、廣島に斯ういふ事があると云ふ事を、新聞や雜誌で細大漏さず知つて居られるから、さう云ふ事を知らずにでも行つたら小さくなる。皆報告しなければならん。さうすると先生も非常に本氣になつて下さつて、賴みに行く度に廣島の有ゆる事件が、先生の手に依つて生き、先生の耳に這入らん仕事は殆ど一つもないのですから、大きな問題は勿論、小さな問題も、先生の手に掛らん問題はないといふ位、それ位廣島縣の爲になつた人で、是程の人はないですね。さうして名刺代りを持つて行くのに、東京で買つたものでも持つて行くと、『こんなものは家にあるよ、要れば遣らう。』と突き返される。それが廣島のマークの這入つた物を持つて行くと、本當に何でもないものでも、『有難う。』と云つて非常に喜んで下さると云つた風で、その點は極めて明

なものですよ。要するに自分の誠意を披瀝すること、誠心から物を持つて行つたといふその精神を喜ばれる。どうも邪魔臭いからと思つて、東京でゞも買うて行つたら迚も御機嫌が惡うて。私はやられた事はないですが人がやられてゐるのを見たことがありますが、要するに自分自身の誠意を披瀝したら、あの方は容易にこちらを容れて下さつて、骨を折つてくれる方でした。あれだけ議員生活をしてゐる間に、何か問題を賴みに行つても拒絕された事は一度もないのです。何でも快くやつて下さる。誠意で賴めば何でもやつて下さる。まことにその點はつきりした方でありました。」（昭和十六年十月二十七日談）

以上諸氏の夫々の述懷を聞いてみると、君の面目眼前に髣髴たるものがある。

又山本久雄氏の語られるところによれば、

「望月先生は自分を信賴する者の爲には、何處までも盡してやるといふ氣持のあつた方で、上京した時なんかも、直ぐに行かないと、直ぐそれを問ふ人で、『何時來たか』『二三日前に來ました』と云ふと『さうか』と云ふ位にお言葉が濁りますが『今、只今着きました』と云ふと大變御機嫌がよかつたやうです。」

（昭和十六年十月二十七日談）

とある。

これなどは何でもない話のやうであるが、こゝには東京製品の土產物を突き返した以上の、はげしさ、きびしさがある。おそらく君は、眞實自分を信賴し敬愛してゐるものなら、『今、只今』來るのが眞情であり禮儀である。それを二三日經つて來るといふのは、すぐに其處に小さいながらも虛僞がある、とす

ることが苛酷なら、少くとも怠惰である、といふことをハツキリと見拔いてゐたのである。

此の如く君は國務大臣になつても亦政界の長老として崇敬されるに至つても、あくまでも廣島縣の望月圭介であつた。その點にくるひがなかつた。從つて君がその鄉土なる廣島縣を愛し、その鄉黨なる廣島縣人を愛したことは、以上の挿話によつて明らかなるところと思ふが、それらに倍して君が愛したものは、その鄉土の習俗であつた。

以下些かそれについて述べて見よう。

まづ倉本正氏の追憶に從ふと、

「先生は傳統的な鄉土の風習や行事に非常に關心を持つてをられましたが、殊に盆踊りや櫂傳馬競爭を大變好んでをられました。歸島される時は、村の青年達は多くの櫂傳馬に分乘しまして、遠く竹原まで迎へに參りますと、先生は痛く悅ばれましたが、昨年歸鄉の際は、先生の方から時局柄お斷りになりました。」

（昭和十六年六月二十八日談）

といふことである。その櫂傳馬及びその歡迎法について、蒔田逸司氏が左の如く語られた。

「種々島民に恩惠を施された先生に對する島民の尊敬は大したものでして、一度鄉里に歸られますと、島を擧げて歡迎いたしました。本校に於きましても、航海練習用の規程に隨ひまして、端艇を連ねて竹原へ出迎へに參ります。上陸地點には特に棧橋を設け、紅白の幕をめぐらし、美しく裝飾しました。汽船から上陸なさる時は本校の端艇に乘つて頂きました。端艇は三艘で、陸上には全校生徒が徒列いたしまして、海軍禮式を以て迎

へました。又村民の歡迎も素晴しく盛大でした。先生は勇壯なる島の名物櫂傳馬を好まれましたので、此村の各部落より一パイづゝ計六パイの櫂傳馬が、競爭して竹原まで出迎へに行きました。これは住吉神社の祭の行事で、村民は櫂傳馬となると狂氣の如くなるのです。十二丁櫓の舟ですが、漕手はお揃ひの白い手袋に白い鉢卷、赤い襯衣を着まして、「えいや」の掛聲を合圖に、「ドン」「ドン」「ドン」と太鼓を打つ。寔に勇壯を極めたものでして、先生は大滿悅の態でした。これが一つには隨行して來られた方に對する先生のお國自慢だつたのです。又隨行の方も迎も喜ばれたやうに見受けられました。」（昭和十六年六月二十五日談）

又出口龜太郎氏も、

「圭介氏は島へ歸られますと、先づ邸宅の裏手にある東之助氏の墓に詣でられ、それから歡迎の人々に挨拶されました。舊の六月廿九日に此島では住吉祭があります。其時の呼物に櫂傳馬の競爭がありますが、これを圭介氏は非常に好まれましたので、歸島されます時は、對岸の竹原までこれでお迎へに行きます。櫂傳馬は東野村に六パイもあります。實に勇壯なものでして、揃つて圭介氏を迎へに行つたものです。圭介氏は祝儀として、一パイの櫂傳馬に五十圓乃至百圓の金を遣つてをられました。又圭介氏は敬老の念が厚く、島に歸られますと、八十才以上の老人全部に、金一封を贈つてをられました。かういふことが四回位あつたと思ひます。自分は獨力で偉くなつたのだといふやうな驕つた風は少しもなく、非常に腰の低い人でした。『儂がかうなつたのは、儂が獨力でなつたのではない、お前達のお蔭でなれたのだ。』と始終かう言つてをられました。」

（昭和十六年六月二十八日談）

と右の如く語られるのであつた。

更に又御大典直後、君に隨つて鄉土に赴き、鄉黨の熱誠あふれる歡迎の狀況を親しく目擊した故佐上信一氏は、當時を回想して左の如く述べられた。

「私は小さい時から望月さんをよく知つてゐるのであります。望月さんの下で仕事を致しましたのは、只今山道さんからもお話がありましたが、御大典の警備につきまして、望月さんが全智全能を傾けられた時代に、丁度內務省の地方局長として、一年半ばかり先生の下で働きましたので、望月さんといふ方について少しばかり私の感想を申述べてみたいと思ひます。御大典が終られまして、その年の五月、御鄉里へ墓詣りに行かれました。その時に望月さんに隨行して參つたのでありますが、殊に廣島あたりの鄉里の出身者が、大臣になつて歸られたといふので、その喜び方はなみなみならぬもので心からの歡迎をされました。政友會の人も民政黨の人も黨派を超越して、望月さんを歡迎したのであります。それから更に鄉里の大崎島に歸られた時には、島の人は櫂傳馬といふ船を揃へて、望月さんを歡迎する。それから各方面の小學校で御大典に對する自分の心持を話された。誠に愉快な旅を續けて東京へ歸られたのであります。恐らく一生涯に、御大典に奉仕し、滯りなくその役を了へ、鄉里へ歸つて兩親の墓に詣り、又友達の墓にも參られ、又廣島全土を上げて歡迎の意を表されたといふことは、最も愉快な事であつたらうと思ふのであります。」（昭和十六年二月四日於築地本願寺、談）

以上の如き君の無私奉公の愛鄉精神に感激した縣下有志は、遂に昭和三年に至り、玆に望月會といふ半ば親睦的な政治研究會が、自づと結成組織されたのであつた。しかもそれが全く政黨政派を超越した會であるといふことは、いかに君の人格が清廉高潔であつたかを、正しく裏書するものであらうと思

ふ。此處に於て編者は、君の謂ふ因果法に泌々と思ひ至らざるを得ないのである。何故ならば、君の鄉黨へ對する愛は、卽ち愛を以て報はれ、その信は卽ち信を以て報はれてゐるからである。

尙いさゝか笑話めくが、附錄として左の挿話を傳へておきたい。常に德少くして祿多きを怖れる君は虛名を忌むこと亦實に甚しかつた。從つて自分からは勿論、たとひ他人の善意によつて成されたことであつても、それが結果に於て、自分の實名に類するやうなことになると思はれる場合、君は徹底的に之を拒絕した。さういふ場合、君は仲々鄉黨有志の人情に負けなかつた。あくまで頑强に拒絕した。それについて柴田重輝氏は、左の如き興味ある回想談を致された。

「廣島縣豐田郡本鄉町に先生の銅像が立つてゐますが、これについて面白い話があります。これは本鄉町を中心とする附近町村の有志が、先生の高德を慕つて、各々據金して作成したものなのですが、元々少額な資金であつたので、作成半ばにして資金の不足を告げてきました。何とか工面をしようにも狹い範圍のことゝて、資金捻出の仕樣もありません。そこで有志達は、これは一つ先生にぶつかつて賴み込んで見ようぢやないかと度胸を決めまして、その中の代表者が上京、先生の許へ參りまして資金の補助を申込みました。實に愉快な話で、先生も驚かれましたが、忽ち苦い顏をして『大體わしは銅像など作つて貰ふことが迷惑なのに、その上金まで出せとは愈〻以て怪しからん。いけん〳〵、やめ〳〵。』と到頭一錢も寄進につかれなかつたさうです。これには本鄉町の有志も困りましたが、折角出來かゝつてゐるものを途中止めにするわけにも行かず、又みんなで據金して遂に完成したのですが、それが今ある銅像なのであります。」（昭和十七年五月十九日談）

銅像については今一つ話がある。それは君の内務大臣當時、御大典御警衛の大任をも完了して國民の信頼更にその大を加ふるに至つた時、君の入閣及び大禮奉行を記念するため、佐上信一、佐々木良一、名川侃市、渡邊伍、森田福市、大橋信吉、宮澤裕、村井二郎吉、岸本斐夫、高宗侊一、嶋居哲、堀内康一、中田謙二、細川潤一郎、宮地茂秋、宮本源之助、小山寛藏、梅田寛一、久保田金四郎、木村寛一、木島茂、藤田好三郎氏等二十二名が發起人となり東京、神奈川、廣島、愛知、愛媛、新潟、兵庫、大阪、熊本、福岡、岡山、北海道等の有志約五百名が據金し、彫刻家上田直次氏に依囑して君の胸像二個を作製し、一を君の坐右へ、一を大崎嶋の生家へ寄贈したのであつた。之には遺の君も辭退しきれず快く受納したのであつたが、此有志諸氏の中に前記本郷町の諸有志が再び加入してゐたのは云ふまでもない。それにしても有志諸氏の範圍が啻にその郷土たる廣島縣にのみかぎらずして、山陽近畿中部關東北陸四國九州北海道にまで亙つてゐることは、今更ながらいかに君の德風を慕ふ人々が多いかゞ窺はれると思ふのである。

二六　趣　味

人はその趣味とするところのものにおいて、最もよくその性格を赤裸々に露はすものであるといふ。いま君の趣味の方面について之を窺ふに、その趣味とするところのあまりに多方面に亙つてゐることには、何人と雖も驚嘆せずにはゐられぬであらう。

君は實に、一般人の之を趣味として樂しむところのものに對し、その凡てに深い理解と豐かな鑑賞とを寄せてゐた。このことは君が如何に社會人として圓滿なる常識を具備してゐたかを、よく物語つてゐると思ふ。而して其の趣味を通じて君を見る時、我等は其處に最もよく端的に、君の面目の躍如たるところのものを知ることが出來るのである。

即ちそれは、第一にその愛好する趣味の種類に於て、それが極めて庶民的のものであつたことである。それはさながら、君の政治的信念が常にさうであつたやうに、自ら高處に立つて獨善的に清風を玩ぶといふやうなことは、君の性格として我慢の出來ぬところであつた。大衆と共に喜び大衆と共に哀しむ、それが君の眞骨頂であつたゞけに、君は多くの政治家達が、漢詩を作るとか、謠曲を嗜むとか、茶器に凝るとか、さうした所謂高尚な趣味とは殆ど沒交渉であると云つてよかつた。少くとも「高尚がる」趣

味は君の決してとらぬところであつた。君の最も愛好したる處のものは、圍碁、音曲、相撲、演劇、これらのものであつた。此の如く、趣味の世界に於ても、君はあくまで市井人であつた。人情大臣の名によつて全國民から敬慕された如く、君は何處までもよりよき隣家の主人であり、苦勞人の小父さんとして一般大衆と共に、同じその趣味の世界に生活したのであつた。その點で君は一層我等に思慕の情を寄せさせるのである。

第二に、その樂しむ世界は平俗であつても、その方法については、卽ち自ら行ふ上に於ても、また鑑賞する上に於ても、頗る潔癖であり嚴格であり、更に又敬虔でさへあつたのである。

卽ち君はその趣味の世界に於ても、何よりも意氣を尙び洗煉を愛した。從つて謙讓ならざる態度を忌み、不斷の錬磨を怠るものを嫌つた。別して低劣なる品格を貶したことは云ふまでもない。誇張して云へば、君はその遊びの世界に於てさへ、常に其處に自己陶冶の何ものかを、君自身の言葉で云へば精神修養の一端を、處生の教訓を見出してゐたのである。君の性格の底にある辛棒强さ、これがその趣味の上にもよく出てゐるのである。

第三に、趣味人として自己の後援する斯道の選手に對しては、始ど溺愛に近い愛情を示しつゝ、而も大いに之を鞭韃してゐた。筆者は次に、君の各方面の趣味に就て逐次述べてみることにする。

音曲

君の音曲愛好は親讓りであつた。

父の東之助は義太夫淨瑠璃をよく語り、母のリツも亦三味線、琴、胡弓の類をよくしたといふ。家兄俊吉も亦父に似て義太夫淨瑠璃をよくしたといふ。令弟乙也氏が端歌の名手であることも著名であつて、一家揃つていづれも音曲の達者揃ひであつたことは、既述せる母リツの臨終の逸話によつても、よく窺ひ知られる處である。

由來關西地方は、義太夫淨瑠璃の頗る盛んな地方である。殊に幡州三備安藝等の中國筋は格別盛んな土地であつて、淨瑠璃と云へばそれは直に義太夫節のことを稱してゐるほどである。彼等義太夫節愛好者は、講を設け會をつくり、常に大阪から著名の太夫三味線彈きを招請して、その技藝を習得してゐた。從つて一口に田舍淨瑠璃と云つても、それらのうちには中々侮り難い名手がゐた。實に此地方に於ける淨瑠璃は庶民階級唯一の健全なる娯樂であり、又一面勸懲の教訓をも含む庶民教化の具として其の役割の大きく認められることも事實であつた。

君がかうした雰圍氣の中に成長しながら、義太夫淨瑠璃に行かず、あまりにも懸け離れた淸元淨瑠璃へ赴き、しかもその技倆たるや、專門家に比して更に遜色なく、優に一家を成してゐたといふことは、

種々なる點より見てまつたく稀有なることである。

何故ならば從來地方人には到底清元は語りこなせないといふのが、斯界の常識であつたからである。しかしこの不審を解く前に、先づ如何にして君が清元淨瑠璃を習得するに至つたかといふ、その動機徑路について考へて見たい。

しかし何分にも四十餘年の昔ではあり、又かゝる遊藝上のことであるから、確たる記錄もないのであるが、不取敢、清元流家元梅吉師の談を聽くことにしよう。

「先生は三味線音樂がお好きで、殊に清元がお好きでした。その頃の相當な名士はみな多藝でしたが、先生の清元はその中でも素人ばなれがしてゐました。先生は初め名人お葉についてお稽古をなさいました。お葉が明治三十四年五月に七十歳で亡くなりました後は、父の處へお稽古においでになりました。先生は御旅行が多いためお稽古も不規則でしたが、東京においでになる時は、必ず毎日お見えになりました。父は二十何年築地に住んでゐましたので、先生は父のことを「築地さん、築地さん。」とお呼びになりました。父が亡くなりましてからは、お稽古はなさいませんでした。それは先生が政治的に漸次重要な地位にお進みになり、お忙しくなられたからでありますが、それでも月三、四回はお浚ひにお見えになり、先代の稽古の時は此處は斯ういふ風に唄つたとか、色々思ひ出をなさいました。それは私にもよい參考になつたことが多く、大へん得る處がございました。

一寸このお葉について申上げますが、清元として今日まで、太夫として勝れた人は多く出てゐますが、女としてお葉ほどの勝れた名人は出て居りません。當時、常磐津林中、竹本越路太夫後の摂津大掾、この三人が明治時代の三名人と稱されました。お葉は四世延壽太夫の妻で、その長女が私の母です。當時の藝人として非常に見識のあつた人で、清元を上流に普及させたのはこの人の力です。その頃の井上馨侯や川田小一郎男に可愛がられて、どの席にも呼ばれて語つてゐました。三味線は父の梅吉が彈いてゐました。在來清元は江戸の人にとつて、これほどピッタリと來る淨瑠璃はないのですが、あまりに粹すぎてゐるため普通の家庭でやることは少いやうでした。それをお葉は、私の父などゝ角田川や其他の上品な新曲をつくつてレベルを上げて行きました。先生はこのお葉について、一、二段お上げになつたさうです。」（因ニ同師ニハ談話書簡等前後三回ニ亘ッテソノ追懷ヲ伺ッタガ便宜上最後ノ日附ヲ以テ統一ス。昭和十七年六月二十五日談）

右の談話より推測すれば、君が清元を習得するに至つた動機は、おそらく初めて代議士となつて上京した後、何かの宴會の席上に於いて、或は席上世外侯が在つたかも知れぬ、とにかく其處でお葉の淨瑠璃を聽いた時に、その端を發するのであらうと推定せられる。

若し然りとすれば、君が當夜の感激は如何ばかりであつたらう。

たとひ耳稽古であつたにせよ、音曲については既に相當の素地があり、且つ何事にも強い感受性と、深い理解力と、豐かな鑑賞力とを持つ君のことであるから、一度お葉の妙技に接しては、まつたくその至藝に感激傾倒したであらうことは想像に難くない。おそらく君は直ちにお葉の許に入門したのではあ

るまいか。もし然りとすれば、君がお葉に入門してより僅か二段の曲目を習得したのみといふ談話より察して、それは大方お葉の歿年近くで、明治三十四五年、君の三十五六歳の頃ではないかと思はれるのである。

努力家で凝り屋の君が、この清元習得といふことに、いかに苦心したか努力したかについては、今日となつて直接これを聞くすべもなく、又何の逸話も殘つてゐないが、その苦心の程は察するに餘りある。何故なれば、それは先にも島渡述べた如く、清元淨瑠璃のみは、その發聲法からして、地方人には容易に習得出來難い音曲であるからなのだ。

それは例へば、生粋の江戸子に完全に義太夫淨瑠璃を語れと云ふに等しく、否それ以上に無理な註文なのである。江戸淨瑠璃三派の中でも、とりわけて清元は優雅哀艶にして又きはめて輕妙洒脫、江戸人の日用會話の語感が、そのまゝ基礎となつてゐる生粋の江戸音曲であるから、アクセントの違つてゐる地方人にとつては、たゞそれだけで習得上非常なハンデイキャップとなるのである。

然るにそれを廣島縣大崎島出身の君が、しかも中年から、多忙のアマチユアとして不定期的な習練の下に、遂にあらゆる惡條件を克服して、斯道の大家を驚嘆させるに至つたといふことは、如何に君が藝術的に傑れた感覺を持ち、且つ如何に不撓の精神力を持つてゐたかゞわかるのである。君は趣味の道に於ても、ぢつとがまんをする辛棒人であつたのである。

果して然らば清元に於ける君の藝質、風格、味はひ等は如何なるものであつたであらうか。

それについて前記清元梅吉師は、編者の需むるまゝに左の如く忌憚なき感想を語られた。

「先生は日常御談話中にはよくお國訛りも出ましたが、清元をお唄ひの時は少しも訛りは出ませんでした。それに又、先生の清元は聲の調子が低いので、八疊か十疊位の部屋で聽くのが一番よく、先生も亦よく知つてらつしやるので、公開の席、つまりお浚ひなどでは一度もお語りになりませんでした。しかしお世辭でなしに本當にお上手でした。殊に小音でお唄ひになる時が一番お上手でした。持ち味とでも云ひますか、細い線に何とも云へぬ巧味がありました。お得意のものは、お俊傳兵衞、梅の春、雁金の三段で、この三段はまことに確かなものでした。」（昭和十七年六月二十五日談）

右の談話にある如く、君の最も得意とする曲目は、梅の春、お俊傳兵衞、雁金の三段であつたといふが、編者は此處にも君の人柄の一端がよく現れてゐると思ふ。

卽ち云ふまでもなく梅の春は、現存する清元の曲目中、古曲に屬する一つであつて、かの北洲と竝んで祝儀物の雙璧であり、優麗淡雅にして然も輕妙、同流屈指の名曲である。又お俊傳兵衞は一名「身替りお俊」とも稱されてゐる世話淨瑠璃で、これも梅の春同樣清元として古曲であるが、最も芝居氣の多い淨瑠璃で、哀艶切々、人情の委曲を盡したもの。然し現今では之を完全に語りこなす太夫は甚だ稀とされてゐる難曲である。また雁金は前記二曲に比してずつと近く明治期に於ける代表作で、君が始めて

入門した名人お葉の作曲による頗る清雅な名曲である。

かうした君の得意の三段によつて、何故君の人柄の一面が偲ばれるのであるかと云へば、この三段はいづれもおちついた、じつくりとした滋味溢るゝ曲目であつて、清元の今一面の風趣たる瓢逸輕妙なる種類の曲目、例へば鳥羽繪、玉兎、傀儡師、三社祭等々清元を二大別する分野の一方の曲目を、一段も得意としてゐなかつたといふことは、中々面白い現象で、些か輕佻なところのあるそれらの曲目が、君の性格に合はなかつたのか、或はあまりにも江戸ッ子式のイキ一つにかゝるそれらの曲目が、學んで及ばざる底のものであつたのか、いづれにしても君の清元を語る場合、興味ある問題であると思はれる。

君が如何に清元を愛し、且つ梅吉派を援助したかについては、遠く我々の想像以上であつて、又其處にいかにも君らしい、ものに對する激しい打ち込みかたが見られるのである。卽ち、清元梅吉師は、

「望月先生が先代梅吉の處へ稽古にお見えになりましたのは、私の十四五の時ですから、明治三十五六年の頃かと思ひます。その頃私は學校に通つてゐましたが、私の父は多年の精進苦勞の後、やつとその社會では第一人者といはれる處まで行つたのですが、私にはそんな苦勞はさせたくないといふ親心から、私を加賀町の加藤といふ洋服屋へ奉公に出しました。これはどうも望月先生の口添へのやうに思ひました。一年ばかりしまして假縫ひも出來るやうになりましたが、どうも面白くないので父の處へ歸りました。しかし父はまだこの道をやらせてくれる氣持はなく、今度は二丁町の下駄屋へやられましたが、これは一日で歸つてきました。その時望月先生がお見えになつて、父に「何と云つても蛙の子は蛙だから、後をつがせたらいゝではないか。」と云つて

下さつたので、父もやつとその氣になり、私をこの社會へ入れてくれました。私の十六の時であります。望月先生はお暇な時は毎日のやうにお稽古にお見えになりましたので、私がぼつ〳〵三味線が彈けるやうになりますと、「彈いて見ろ。」と仰有る。私が彈きますと「まだ〳〵いけない。お前をこの道に入れさせたのは私の責任だから、しつかりやつてくれよ。」と屢〻激勵されました。私の二十五の時、父は五十八で亡くなりました。それから以後はまるで親のやうに何くれとなくお世話して下さいました。まつたく有難いと思つてゐます。其後、私と延壽太夫との間に所謂新體制舊體制の意見の衝突があり、どうにも行かなくなつたので、私は誰方にも相談せずに、延壽太夫から分離してしまひました。後で先生は「やつたものは仕方がない。とにかくやつた上からは、骨が舍利になるまでやれ。」と勵まして下さいました。その後仲裁者が出ましたが、先生は「今合體するのは折角そこまで仕上げた弟子達を殺すやうなものだ。それでは弟子達が可哀さうだから、合體案は保留した方がよい。」と仰有つて、贊成なさいませんでした。其後引つゞき私一派に對しまして、並々ならぬ御後援を受けましたが、殊に太夫に對しては始終御注意をして下さいました。その御注意は專門家より見ても適切な事が多く、よく太夫の試驗をして下さいました。芝居の出語りの時なども心配してお聽きになり、「二枚目の太夫は聲が立たない、あれではいけない。」などゝお叱言などもありました。其後弟子の梅太郎を娘の婿にいたし、太夫にさせようと思つて先生に試驗していたゞきました處、「これはよい、充分太夫になれる。」と喜んで下さいました。これが只今の梅壽太夫でございます。まつたく大臣にしては珍しい粹人でいらつしやいました。そして前にも申しましたやうに、まるで親のやうにお目にかゝる度に、始終藝の上やら處世の上につきまして、非常に教訓になることを仰有つて下さいました。そしてそれはお亡くなりになりますまで、ずつと變りませんで

した。去年の十一月、お亡くなりになる少し前です。先生は奈良へ御旅行されました。その時私は大阪歌舞伎座へ出勤してゐました。さうしますと或晩、先生から晩に來いとお招きを受けましたので、同く出勤中の中村吉右衛門と一緒に、その料亭へ行きますと、林元大阪府知事も御一緒でした。先生は吉右衛門の唄、私の三味線で「梅の春」をといふ御註文なので、梅の春を吉右衛門が唄ひ、私が彈きました。先生は大へんな御機嫌でした。其後十二月の末、一月興行に出勤のため大阪へ參りますと、元日の朝未明に、先生が亡くなられたといふことを聽きまして、昏倒せんばかりに吃驚しました。吉右衛門と一緒にやつた「梅の春」がお別れになりました。先生もあれが清元をお聽きになつたおしまひであつたことゝ思ひます。』（昭和十七年六月二十五日談）

と語られるのであつた。

又君が梅吉師の爲めに病軀を推してその後援會に出席して禮を述べた事等については、既に「性格」の章の人情の項に於て述べた如くである。いかに君が梅吉一派に對し、溺愛に近い愛情を以て、之を援助してゐたかがわかる。

尙君は清元のみでなく小唄をも非常によくした。尤も小唄は明治年間清元流の人々によつて創始されたもので、從つてその骨法は清元である。現に梅吉師にも多くの小唄作曲があるのを見ても、其間の脈絡はよくわかるのであるが、君も亦頗るこれをよくし、就中「五萬石」「四條河原」「われが住家」等は得意中の得意であつた。

それについて中村吉右衛門丈は左の如く語られた。

「先生は小唄の五萬石がお好きでした、小音ではありますが寂びのあるのゞで、それこそたのしんでやつていらしつた。私も小唄をいろ〳〵教はりました。」（昭和十六年十一月一日談）

その五萬石については彼らしい逸話がある。

即ち梅吉師は

「小唄の勝太郎は私の門弟ですが、これが或る時、レコード會社から小唄の五萬石を吹き込んでくれと頼まれたが、自分には自信がないから誰か上手な人に教はりたいと云つてやつてきました。そこで私は、五萬石なら望月先生のおはこ中のおはこだから、望月先生に習つて來いと、家内に連れてやらせて賴みました。そこで勝太郎は先生から口傳を受けてレコードに吹き込んだわけですが、先生はそのレコードをお聽きになつて『儂のと少しも違つてゐない。』そして『勝太郎が辭を低うして習ひに來たのだから、これから儂はもう五萬石を唄ふわけにはいかない。』と仰有いました。先生らしいお言葉だと思ひます。」（昭和十七年六月二十五日談）

と語られた。

さながら自分が藝道人であるかの如く、斯道の仁義を重んじるこの潔癖さは、古名人の逸話を聞く心地がする。かうした考へ方は傳統墨守の藝界に於ても今は地を拂つて跡もない。

然し君が是程の技倆を得るに至る迄の研鑽は並々ならぬものがあつたであらうが、その至藝を稱されるに及んでからも、常に反省研究することを怠らなかつた。此點が通常の素人藝、旦那藝と違ふ處であ

つた。

それについて中川の女將は左のやうな思ひ出を語られた。

「電氣蓄音機で吹込んで直ぐ聽かれるのがありましたね、あれへ先生が小唄をお入れになつて直ぐ其の場でお聽きになつたのです。『フン、わしは斯うも拙いとは思はなかつた。よく今までやつたものだ。こんなことぢやとても見つともなくて聞かれぬ、どうしてもこれは嫌やだから入れ直す。』と仰しやつて、それから二三日經つて『今日は聲が好いからやつて見る。』と言つて吹込まれたことがあるのです。」（昭和十六年五月五日談）

尙これは餘談ながら、君は自分の淸元、竝に小唄には相當以上の自信を持つてゐた。君は天眞爛漫に、よく人に對しても「儂の淸元は素人のものとはモノが違ふ。太夫になつてゐれば一流の太夫だ。」と口外してゐた。君の淸元を聽くほどのもので、この自讃に遭はないものは一人もなかつたであらう。

卽ち頭山滿氏も君の自讃に當てられた一人であるが、夫人と共に交々左の如く語られた。

頭山翁「唄が大分上手で、去年の正月か料理屋へ俺とか婆（峰尾夫人）とかを招いて『私の唄は素人のとモノが違ひます。』と云つて三味線に合せて唄つてきかせた。

〽春景色、浮いて鷗の一イ二ウ三イ四、いつか東へ筑波根の、かの面この面を都鳥……とか云ふ文句の唄であつた。

俺も大分派手な遊びをしたが三味線に合ふ唄などは唄へなかつた。

峰尾夫人「唄を聽いたのは去年の正月の七日の夜でした。望月さんがお唄ひになつた「梅の春」といふのは

なかなか目出度いものださうで、望月さんは淸元の名取りでしたさうです。『私のは素人のではありません。玄人です。頭山翁に年始にお聞かせします。私はこれで立つ處ぢやつたが、つい政治の方へ行つた。』と云つて、大變好い聲で唄はれました。

その席には、天勝も來て居りました。『私もヤメましてから一寸もしませんけれど、今夜は特別ですから。』と云つて、踊つたり、手品をしたりしました。」

頭山翁「好く覺えてゐるね。あれは品のよい唄ぢやつた。防共の會やなどでは一緒になつてゐるけれども、俺はあれの唄を二度聞いた。」（望月圭介閣下葬儀畫帖所載）

又君の自讃がこんな調子で現はれてゐることもあつた。卽ち「東亞國政」に依れば

「その後トン〳〵拍子に出世をされたが、品川の邸で遞信大臣になる前までは隨分苦勞もされたらしい。矢張その前後であつたが、政治家の不遇を話し、シンミリした調子で、昨夜ラジオで家內太夫の淸元千羽鶴を聽いたが、自分も政治で費つた金を戻してくれゝば、太夫になつた方がよかつた。」（昭和十六年九月號記載）

と記してゐる

又同じく中村吉右衞門曰く

「曾て望月先生は、自分は政治が好きな爲に誤つてかういふ事になつたけれど、若し儂が淸元の太夫としてやつてゐたら、相當な處まで行つた筈だがと仰有つてをられました。」と。（昭和十六年十一月一日談）

又梅吉師も同じくそれについて左の如く語られた。

「先生はよく『儂は代議士などにならず、清元の太夫になつてゐた方がよかつた。太夫になつて居れば、お前達より儂の方が巧いぞ。』と仰有つてましたが、或はさうだつたかも知れません。」（昭和十七年六月二十五日談）

君のその「もし太夫になつてゐたら。」といふ氣持は、一面君の本音でもあつた。それは得意とも亦失意とも、眞劍とも亦洒落ともその時と場合によつて如何やうにもとれたが、いづれにしてもそれが君の本音であつたことには違ひなかつた。又その自讃も文字通り自他共に許せる妙域にあつた君としては當然のことであつたであらう。

尙、巷間よく君を稱して清元の名取りの如く取沙汰してゐる向きがあるが、それに就いて梅吉師は左の如くその說を打ち消された。

「先生が先代に就いてお稽古をなさいました當時は、お客の名取りはありませんでした。それは素人に名を上げる事は出來ない事になつてゐました、先生も『儂は名取りになるなら、ほんとの太夫の名取りになる。』と仰有つてゐられました。」（昭和十七年六月二十五日談）

しかし君の清元は、さう易々と誰にでも直ぐに聽かせはしなかつた。これは勿體ぶるといふのではなく、云はゞ愼重を期したのであらうが、しかしそれは君の圍碁や書に於ける場合の愼重さとは、又餘程趣を異にしてゐた。

それについて現內務大臣湯澤三千男氏は左の如く語られるのであつた。

「望月さんが清元の名手であるといふことは豫て聽いてゐたが、私は遂に聽く機會がなかつた。宴席などで屢屢一緒になつたのであるが、遂に一度も唄はれたことがなかつた。頗る愼重を期してゐられたやうであつた。しかし小唄は聽いたことがある。望月さんの小唄は、その清元と相竝んで有名なものであるが、遺に結構なものであつた。それから都々逸も聽いたことがあるが、これが又まことに節廻しの面白いものであつた。そして大抵は例のアンコ入りの都々逸で、都々逸の節から清元の節なり、新內の節なりへ入り、それから又都々逸の節へ移る變化の妙は寔に面白いものであつた。その中でいまだに耳に殘つてゐる一つ二つを申せば、

愘氣は女のつゝしむところ
〻姿もいつか亂れ
りや男も同じこと

といふ清元の「保名」の入つたものと、

疑ひ晴れたらその手を放せ
〻向うへちら〳〵小提灯
箱屋も來てゐる夜も更ける

といふ新內の「お梅」の入つたものとであつた。何處で習つて來られたか、又は御自分の創作かそれは知らぬが、とにかく堂に入つたものであつた。」（昭和十七年十月廿六日談）

尙、君の臺灣行以來の知己であり、且つ君と共に先代清元梅吉に就て、清元を習得されたる野間五造氏の追憶談を以て、此の章を終ることにする。

「明治中期の頃、若手政治家の內に、粹人とか通人とか噂された、今樣三人衆なる者があつた。夫れは花柳界の裏面史に精通して居るのみならず、和歌や今樣の作者であると言うて持て囃された岡崎邦輔、又た音曲や相撲の總後見にして兼ねて淸元流に堪能であつた望月圭介、骨董や茶の湯の博士を以て任じてゐた高橋蒂庵宗匠、と是れが三人衆であつて、又た是等の先達衆を小供扱ひにして、頭ごなしに批判を加へてゐたのが俗に永田町サンと呼ばれてゐた伊東巳代治君であつた。

或日私が永田町の伊東邸へ遊びに往つた時、伊東君は私に向ひ、

「近頃望月の淸元が多少堂に入つたと言ふではないか。一度聞きたいものである。」

との話が出たので、數日後私は兩君を木挽町の待合田川へ招待して淸元會を開いた。宴が始まると、始めの內は相撲道の批評で持ち切つてゐた。望月氏の推薦力士で幕の內に這入つた者が澤山あるのみならず、中には三役筆頭にまで進んだ者もあつた。伊東君も感服の外なく

「平常はヤレ國技奬勵だの體育奬勵だのと大きな口を利きながら、實際的には何等指導も世話もする者はないのだ。何々華族樣といふ相撲贔屓のお客樣も望月君には頭が上るまいと思ふよ。」

など手嚴しい批判の後で、今夜の立役者たる望月君のお得意、淸元「梅の春」を梅吉師匠の絃で、美事に唄ひ終つて幕となつた。其後數日を經て、今度は伊東君の案內で、濱町の彌生で、第二回淸元會が開かれた。相不

變主人公の花柳演說から席が賑ひ始めた。

「昔時の政治家は中々碎けた者であつたよ。今の若手連中を見ると、無暗に固た張つて、唄など唄へば大なる恥辱のやうに考へて居るのは、間違ひであらうと思ふよ。昔の人達はそれ〴〵御自慢の遊藝を持つてゐた者である。現に大臣參議の內で、遊藝自慢を擧げて見ると、西園寺の淸元、伊藤の都々逸、芳川顯正の義太夫竝に常磐津、奈良原繁の薩摩琵琶、桂の新內など呼物であつた。又た昔時德川時代にはお家附きの遊藝があつて、夫れが出來ねば跡目相續すら許されなかつた樣な次第で、今の公達連の中でも、謠曲や仕舞にかけては、玄人跣足の人達も珍しく無いと云ふことである。お互ひ今後は、社會生活の潤ひとして大いに遊藝を奬勵しようではないか。」

この提案には望月君も大いに賛成したのであつた。」（昭和十七年九月十一日誌）

又君は大衆音曲の一つとして浪曲を愛した。殊に桃中軒派の莊重沈痛なる節調を愛した。浪曲界に於て君が最も贔屓にしたのは、名人雲右衞門の高弟峯右衞門であつた。君はよく峯右衞門を宴席に招いて忠臣義士の物語を一席語らせては樂しんでゐた。又或時は浪曲の民衆間に於ける感化力を利して、社界思想善導を圖らうと企劃した事もあつたといふ。然し勿論浪曲に對しては、淸元に對するほど純粹に打ち込んで居たのではなかつた。

演劇

すべてのものゝそれ〴〵の生命を生かすことを念とする君は、藝術の効用といふ事についても、無用の干渉を好まなかつた。この點にも君の偉さが見える。然し君も政治家である以上、藝術の國策への順應とか協力とか云ふ事については頗る之を顧慮してゐたが、たゞそのために所謂角を撓めんとして牛を殺すが如き愚は決してしなかつた。卽ち君は藝術それ自體のよさを生かしつゝ、然かも國民へ對してより、健全な教養と娯樂を與へる藝術を要望してゐた。

君はさうした國民へ對して最も強い影響力を持つ處の藝術たる、文學演劇映畫等の中、最も演劇を愛好し、又最も關心を持つてゐた。何事にも深い豐かな鑑賞眼を持つ君は、その愛好する演劇に對してはより一層の鑑賞眼を有し、その蘊蓄は一般愛劇家の水準を、遙かに超えたものであつた。

然らば君は如何なる演劇を最も愛好してゐたかと云ふに、大石夫人の談によれば、

「父はどんな演劇でも好きでございましたが、能だけは一度も見に行かなかつたやうでございます。何度も奬めたのでございましたが、たうとう參りませんでした。其他の所謂お芝居は、どんなお芝居でも一應は見て居りますやうで、中でも一番好みましたのは舊劇、歌舞伎芝居であつたやうでございます。それも殊に勸進帳とか寺子屋とか地震加藤とか云ふ忠臣義士の活躍する芝居でして、それが殊に出來の良かつた場合、私共にも是

非あれを見に行けと奬めたことも度々でございました。」（昭和十七年六月二十五日談）

と語られた。

君が受けた時代の教養として歌舞伎芝居を好み、且つ其中に於ても、殊にさうした劇としての內容的にも演技的にも等しく名劇と稱せられる處のものを愛したと云ふ事は、遺に劇に對する鑑識の深さを思はせて充分なるものがある。

然し君は自ら演劇當事者へ「斯々のものを演せよ」と云ふ註文は一切出さなかつた。

それは一應各々の立場を尊重する君の主義からして當然の事ではあつたが、自分が感激した演劇については極力これを稱揚した。それについては後に劇壇人自らの言葉として詳しく述べる心算であるが、それほど劇通であり、見功者であつた君は、又從つて贔屓俳優、贔屓劇團のあつた事も當然であつた。

然し君の贔屓とする俳優竝に劇團は、單に舞臺上の技藝の巧拙にのみ依らなかつた。君が何に對してもさうであつたやうに、俳優個人、劇團そのものへ對しても、高慢を嫌ひ、怠惰を惡んだ。劇團人としての品位と熱意と誠實とを重んじた。

從つて俳優個人として君が最も愛したのは中村吉右衞門であつた。又劇團として最も多く後援したのは前進座であつた。この兩者を所謂贔屓とした處にも君の性格の一面が實によく現れてゐると思ふ。

何故なれば中村吉右衞門丈は既にその少年時代より神童の名を擅にした天才俳優で、その時代物に於

ける莊重さは九世團洲の衣鉢を傳ふるものと稱され、その世話物に於ける輕妙洒脫は又以て比類なしと稱されてゐる。かゝる至藝の人でありながら又頗るの努力家であり、殊にその謙讓なる態度は歌舞伎界稀に見る處のもので、その人格技藝等洵に梨園の範とすべき俳優である。

これが君の以て最眞とする所のものであつた。君が如何に吉右衞門丈を愛したかにつき、左に同優の追懷談を掲げよう。

「先生には私、大へん可愛がつていたゞきました。本日は御命日なので、御覽の通り、この虎の繪を掛けまして、先生をお偲び申してゐた處でした。この繪は先生から頂戴いたしましたもので、御命日には必ずかうして床の間へ掛けさせていたゞいてをります。此の繪を頂いたことにつきましては、次のやうないはれがございます。私が滿洲へ慰問興行に立ちます前夜、夜更けてから表の門をトントン叩く人がございます。そして『吉右衞門居るか、俺だ、俺だ。』と呶鳴つて居りますので、弟子は驚いてこんな夜更けに誰だらう。門を開けてもいいものかどうかと躊らつて居りますので、私が門の處まで出て見ますと、それがお察しの通り先生なのです。『まアこんな夜更けにどう遊ばしたのです、さアどうぞお上り下さいまし。』と喫驚やら恐縮やら、とにかく奥の間へお通し申しますと、先生はすぐ一本の軸をおひろげになりながら、『此間お前が滿洲へ立つと聞いたから、平生體の弱いお前が彼地で病氣にでもなつたらと思ふと、居ても立つても居られないので、吳石の虎の繪を持つてきた。昔から虎は千里行つて千里歸るといふ旅立ちなどには緣起のいゝものだ、さア、この虎のやうに元氣で行つて歸つて來い』と仰有つて下さいました。

私は目の前の虎の繪を見、先生のお言葉を聽いてをりますうちに、たうとう泣いてしまひました。」（昭和十六年十一月一日談）

君が如何に同優を愛してゐたかは、この一事によつてもよく窺ひ知られると思ふ。

更に同優は

「先生は御身分あるお方にも拘らず、實にお氣輕で、何でも思ひ立つとすぐ濟まさなければ氣の濟まぬお方でした。從つて私共にも決して窮屈な氣持におさせにならず、話しよいやうに仕向けて下さいました。そんなわけで先生にお目にかゝると、遂々長話になるのがおきまりでございました。」（同日談）

更に同優は彼より受けた藝道の教訓について、

「藝の事に就きましては、先生は一切理窟つぽい事がお嫌ひでした。『理窟でない心持が大切だ。隨つて舞臺に出る藝人は平生の修養が大切だ。平生のすべてが、人間そのまゝが出るから平生が大切だ。』と仰有いました。有難い教訓だと思つて居ります。」（同日談）

と語られた

更に藝術家と物慾について同優に與へた處の教訓については、既に「尙氣と人情」の頃にて述べた如くである。

扨又前進座について云へば、同座は新國劇と並び稱せられる新興劇團の雙璧であつて、一座結成以來約十年、粒々辛苦不斷の努力によつて今日の聲名をかち得た劇團であり、その成功はまつたく文字通り

座員の一致協力、その汗血の結果であつた。

この一にも努力二にも努力、直往邁進の意氣に感じた君は、その發生當初より陰に陽にあらゆる援助を惜まなかつた。君が援助を寄せる劇團の一つを見ても、君の性格を特質づけてゐる『辛棒で通す』『がまんで功を期す』といふことがよく見えるのである。

君がさうした同質的同感から寄せる心からなる好意につき、同座の統率者河原崎長十郎、中村翫右衞門の兩優は、交々感激を以て左の如く追懷するのであつた。

「先生に始めてお目にかゝりましたのは、稼業柄大變やはらかな處でございまして、新橋の「うのは」といふ待合でございました。丁度前進座旗擧直後でございまして、「うのは」のお女將さんが、望月先生にあんた達の心意氣をお話したら、むゝ、さうした連中なら逢つてやらうと仰有つたから、お目にかゝるがいゝと云つてくれましたので、或る晩二人で先生に始めてお目にかゝりました。其時はいろ〳〵激勵やら教訓のお言葉を頂いてお別れいたしましたが、其後お目にかゝつた時『お前達にいゝ男を紹介しよう』と仰有つて一人のお方を御紹介下さいました。そして『此男が保良淺之助だ。代議士ではあるが芝居が飯よりも好きで興行の方もやつてゐる籠寅といふ男だ。』と其時初めて九州興行界の大立物籠寅さんにお目にかゝりました。『九州ではお前達の來演を望んでゐるさうだから行つたらどうだ。役者は望まれて芝居をするのが何よりの幸福だ。』とのお言葉で、それがキツカケとなり、籠寅さんのお世話で始めて九州巡業をいたしまして、彼方に多くのファンを作る事が出來ました。先生にはさういふ風に興行の御心配までして頂きましたが、殊に宣傳につきましては實によくお

力になつて下さいました。それは主に巡業で行く先々の名士宛の御紹介狀で、これは中々効果的でございました。そのお手紙の內容は、いつも先へ私共へお見せになりましたが、それにはいつも『此者達は非常に眞面目に熱心にやつてゐる連中だから是非後援を賴む。又後援していたゞいても決して貴下の顏を汚すやうなこと御迷惑をかけるやうなことは絕對に致さぬ連中であるから何卒安心して後援をしてくれ。』といふ意味のお手紙で、そして『これでいゝな、わかつたな。』と仰有つて封をしてお出しになります。先生にさういふ御紹介狀を出されますと、私共としましても一層熱心に又愼しみ深く致さなければならぬわけで、つまり之は先方と私共へと双方へ打つ釘で、怖い事は仰有りませんがそれ以上に胸へこたへる事でございました。さういふ工合で先生のお力で隨分御贔屓も殖え、またその層も隨分高まり擴まりました。中には『望月先生のお芝居』と仰有つてるらつしやる方もある位でございました。それから吉祥寺に私共の研究所が出來ました時も大變お喜び下さいまして、その落成式にはおいでを願ひまして、先生の御發聲にて萬歲を唱へさせていたゞきました。又地方巡業から歸京いたしますと大抵御挨拶に伺ひましたが、そんな時、先生はいつも直ぐ『どうだ、此頃はうまく行つてるか、大丈夫か』とお訊ねになるのが例でした。これは暗に私共の一致協力の精神が弛みはせぬかとの御心配からなのでした。從つて又先生は座の成績を非常に御心配下さり、每興行必ず御見物においで下さいました。時には前觸れもなしにブラリとおいでになつて、二階の隅などで御覽になつていらつしやるのを見つけて、驚いて御挨拶に參り、もつと良い場處を探させますから。と申上げますと、『いや、儂はこれでえゝ。良い場處はたまに來る大衆へ上げたがえゝ。』と仰有るので一層恐縮する次第でした。

先生は私共の芝居に對して、決して『あゝしろ、かうしろ、かういふやうなものをやれ。』と云ふやうな御註文

は絶對にございませんでした。又私共の藝につきましても、その巧拙を御批評下さることもございませんでした。たゞ『今度はよかつたぞ。』とか『今度は儂は途中で歸つたよ。』とか仰有るくらゐでした。たゞ勸進帳の時だけは大變お讃めのお言葉をいたゞきました。『今度はみんな揃つて良い出來であつた。やはり芝居でもお互を扶け合つて、もり立てるやうにして演つて行けば、きつと面白いものになるものだ。自分だけを光らせようと思ふと芝居全部が詰まらんやうになる。』とよい教訓をいたゞきました。そして此時は更に其上に『慰勞の印ぢや』と仰有つて結構なお酒を澤山いたゞきました。とにかく先生のお話を伺つて居りますと、一言一言みな味ひの深いお言葉なので、その中から我々で摑む氣になればいくらでも摑めるといふわけで、お話を伺つてゐる間中緊張いたしたものでございます。まことに先生の親身も及ばぬ御愛顧には、座員一同まつたく感激いたして居ります。又おなくなり遊ばされた後、私共へまで結構なお掛軸をおかたみに頂戴いたし、大へん有難いことに存じて居ります。何にいたしましてもよい御指導者を失ひまして吾々はまことに哀しく存じて居ります。」

（昭和十七年六月二十四日談）

相撲

君の相撲好きも相當著名な話である。

春夏兩場所、定めの桝へ家の子や贔屓の者を引具した君の悠然たる和服姿を見ない日はないと云ふ。君自身相撲好きの辯として、よくこんな事を云つてゐた。

「吾輩が相撲好きなのは、彼等が一度土俵の上に立てば、私利私欲の念を離れ、唯力一杯一心にやるからだ。又人間といふものは、私欲がないと、不思議に金に不自由せん。政治家もさうぢや。何よりそれが必要ぢや。」

如何にも君らしい相撲觀である。しかし思ふにそれは後よりつけた尤らしい理窟であつて、君は天性相撲好きなのである。理窟はないのである。體格のいゝ君は子供の時から相撲好きで、又相當强かつたといふ。卽ち倉本正氏は

「閣下は若い時から相撲が好きで、又中々强い方でした。」（昭和十六年六月二十八日談）

と語られるし、又長福寺住職も

「先生は非常に相撲がお好きでして、それについて、こんな逸話があります。島に力士が興行に參りますと、披露に風呂數を配つたものです。無論大望月には眞先に挨拶に參りましたが、この力士「宜敷お願ひいたします。」と挨拶が濟むか濟まぬのに、『おい、お前は角力取りだらう。そんなら儂と一番とらう。』と云ふが早いか裸となり、啞然としてをる力士を庭へ引張り出して、無理矢理に角力を取られたことがあると云ふ話です。」

（昭和十六年六月二十四日談）

と語られた。

洵に天眞爛漫聞くだけで愉快な話である。又蒔田逸司氏も左の如く語られた。

「先生は相撲が大好きでしたので、御歸鄕の折本校で、相撲大會を開いてお目にかけました處、大變お悦びになりました。」（昭和十六年六月二十五日談）

既に屢〻述べた如く、一旦愛するとなると溺愛に近い愛情を寄せる君は、その趣味生活に於ても、各界の選手にそれ〴〵の所謂贔屓があつた。卽ち方圓界に於ける瀨越、音曲界に於ける梅吉、劇界に於ける吉右衞門と云ふ如く、角界に於いては安藝の海であつた。

しかし彼は安藝の海との關係以前に、既にその所屬部屋たる出羽の海部屋が贔屓であつた。出羽の海部屋を愛したのは云ふまでもなく、その主將横綱常陸山を愛したからであつた。

君と常陸山との關係は數十年の過去に溯り、同鄕の政友串本康三氏の紹介による。

富島暢夫氏の談によれば左の通りである。

「常陸山が大阪角力の大關として來廣した時、大病を患ひ一行から離れたが、其時はまつたくルンペンのやうであつた。其時串本氏は彼を助けて自分の處で活版屋を經營させてやつて、半年位も面倒を見てやつた。串本氏の常陸山贔屓は彼が代議士である事よりも有名であつた。」（昭和十六年五月一日談）

串本氏の紹介によつて、始めて常陸山を知つた君は、夙にその唯者でないことを見拔いた。そして大

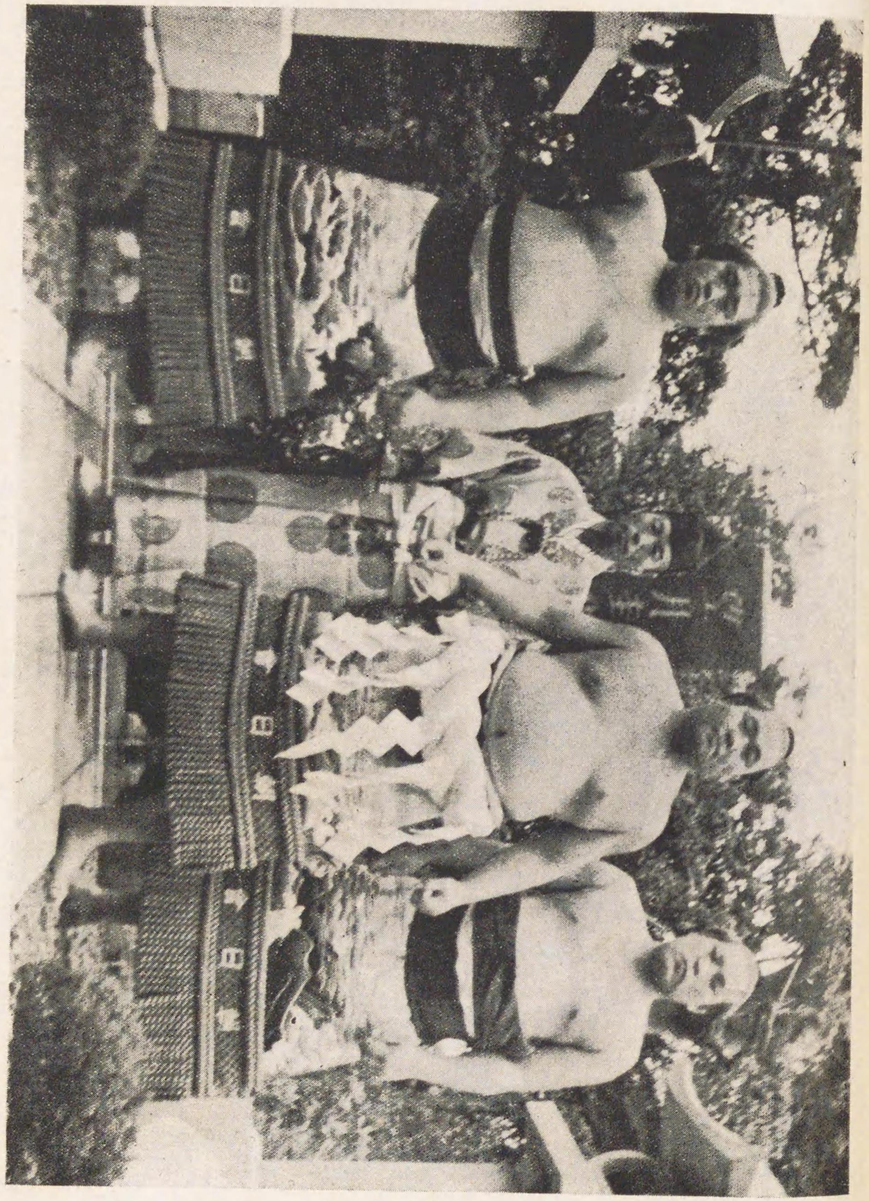
いに常陸山を激勵した。其後に於ける常陸山の精進は目覺ましく、めき〳〵と躍進して、遂に東京角力の第一人者として、名實共に日の下開山の横綱を張つた。而してその部屋に於ける規律正しい荒稽古は實に角界の典規であり、從つて幾多の俊秀輩出して、角道史上燦として出羽の海部屋全盛期を現出せしめるに至つた。

君は常陸山のその意氣と實行力に感激して以來、熱烈なる出羽の海部屋ファンとなつたのである。

君が現横綱安藝の海を愛した事は世間周知の事實であるが、君が安藝の海後援會長となり彼を鞭韃援助するに至つたその徑路につき、中野氏は

「望月さんは、安藝の海を子供の如く色々の方面から激勵された。精神的方面その他の方面に亙つて激勵されてをつた。實は安藝の海が廣島から出まして幕の内へ入ると共に、こゝにるます諏訪君と二人で縣人會の音頭をとりまして、新年宴會の席上安藝の海後援會を作つてやりました。其時會長は誰にしようかと相談しましたが、これは望月さんにお賴みしようと、安藝の海を望月さんの前へ連れて行きまして、紹介をし、會長を賴みました。望月さんは快く引受けて下さつて、それから後は親身になつて世話をして下さいました。安藝の海は望月さんが死なれて以來、望月さんと共に相撲を取る氣持で、出羽海部屋に望月さんの寫眞を置いて、士俵へ出る前には今から行つて參りますと挨拶をし士俵へ出るのださうであります。いかに望月さんを敬慕してるたかが判ります。」（昭和十六年二月四日談）

と語られた。



君が如何に安藝の海を愛してゐたかについて原嘉道氏は左の如く語られた。

「何年の何の場所であつたかハツキリ覺えて居りませんが、望月君も見に行き私も見に行つたのでありますが、その日双葉山と安藝の海の取組がある。ところがもう間もなくその取組になるといふ時になつて望月君が立上る。樣子を見ると歸りさうである。『何だ君、今歸るのはどういふわけだ。』と云ふと『今日は見ちや居られぬ。』と云ふ。『そんなことはない、折角今迄見たのだから見て行つたらよいぢやないか』『いや、俺は歸る。』斯う云つて歸つてしまつた。ところが愈〻双葉山安藝の海の一番になると、安藝の海が立派に双葉山を倒してその前進を食ひ止めたのであります。これは丁度先程中島さんのお話の、望月君が大東亞戰爭が始つて皇軍の連戰連勝の戰果を見落したのと同じやうな事であると思ふのであります。」（昭和十七年一月二十五日談）

「見ちやアゐられぬ。」と歸る熱情漢の君と、「そんなことはない、折角今迄見てゐたのに。」と引とめる冷靜なる原氏、何といふ對照の妙であらう。まつたく君の面目躍如たるものがあるではないか。

又清元梅吉氏も君の角狂ぶりとその角力哲學を左の如く語つてゐる。

「相撲には始終誘はれました。力士では安藝の海が御贔屓でした。やつと立上ると『あつ、西が勝つぞ。』『東が勝つぞ。』と仰有る。それが殆ど適中しました。先生は『大抵の場合、首を下げて下手に出た方が勝つ。處世の道もそれと同じで、常に下手に組まなければいけない。』と仰有いました。」

此の如く贔屓の力士が登場せぬ限り、君も亦悠々と角力の妙味を滿喫しつゝ周圍の者へ、お得意の速成教訓を與へることが出來るのであつた。

このやうに君の愛顧を受けた安藝の海は、其後益〻快調の進擊を續け、遂に昭和十七年の春場所に、宿望成つて目出度く日の下開山横綱の角道最高地位を占むるに至つた。彼はこれもひとへに君の慈愛あふるゝ鞭韃の賜物なりとし、君の新墓の成るを待つて、十八年五月、出羽の海部屋總帥として一行を從へ、大崎島矢弓に渡り、君の墓前に横綱就任の報告をなし、更に本場所さながらの土俵入を行つて、曾ての愛顧に應へたのであつた。

「これでやつと、先生御生前の御厚恩に、些かお報いできました。この後はこの地位を恥しめないやうに努力して、地下よりの先生の御聲援にお應へする覺悟でをります。」

これはその時、安藝の海がもらした感慨であつた。

別掲の寫眞は其時の記念撮影によるものであるが、ともかくも此一事は角界近來の美談として喧傳されてゐる。

君は運動に關しては徹頭徹尾相撲一點張りの頑固さであつた。それについて佐々木良一氏は左の如く語られた。

「或る時スポーツの話が出た。『先生は野球を御存じですか。』『野球は駄目だ。野球は身が入らぬ。何て云つても日本では相撲だ。あの立合を見なくてはいけない。あゝいふものは野球にはないだらう。』『でも相撲を見るのは特殊な階級にのみ限られてゐるではないですか。』『むゝ、さういふところもないではないな。』以上の

やうな問答をしたことがあつた。このやうに先生は相撲を激賞してゐられるが、さて、その野球をその後どういふやうにしてであるか、それが何であつたか覺えてないが、ちやんと見に出かけてゐられる。さうして野球のよさも理解していろいろ語られたことがある。かういふ態度にもたしかに偉いところがあつた。」（昭和十六年四月十三日談）

何故君が凡ゆる運動の中から、斯くも徹頭徹尾相撲のみを愛好したかは、天性の好物であつた以外、又例の教訓的な禮讃以外に、右の佐々木氏の談話にもある如く、土俵上あの立合ひの一瞬の妙味についてであらう。いづれもの角通が等しくさうであるやうに、君もその立合一瞬の妙味に、相撲大半の妙味を滿喫してゐたのである。

君はこの妙味こそは日本武道に相通じるそれで、あくまでも日本的なものであり、一般洋式運動には到底求め得られないものと信じてゐた。たゞ一般愛好者としての世界にとゞまることが出來ず、どうしても最眞をつくらねば、溺愛するものを作らねば我慢の出來なかつた處に、激情家の君の面目をまざまざと見ることが出來るのである。

圍　碁

君は頗る圍碁を愛好した。その圍碁愛好は是亦親讓りであり、且つ一家揃つての碁好きであつた。君自ら吾家の圍碁を評して、

「儂の家は皆碁好きぢやが、家では弟の乙也が一番強うて二段ぢや。次が儂で弟へ二目ぢや。兄の俊吉は儂より少し弱く、父は更に兄より弱かつた。不思議に儂の家の碁は下へ行くほど強うなつて居る。」

と語つてゐたといふ。それほど碁好きな一家であり、又君の手腕も此の如く相當なものであつた。

然らばその棋風は如何といふに、乙也氏は

「兄は碁につきましては私に二目でした。洵に品のよい碁でしたが、むしろ品に捉はれたゝめ、力の足りないところがあつた、と左樣に思へるほど、下品な碁を嫌つて居りました。」（昭和十六年四月三十日談）

と語られ、又瀾越憲作八段は、專門家としての立場より左の如くこれを評せられた。

「先生と私との手合は五子であつた。先生の棋風は、所謂政治家らしい覇氣縱横ではなく、正道を履んで違へざらんとする著實一方であつた。棋風を通じて觀た先生は、政策の人ではなくて正しい履踐の人であつた。」（「棋道」昭和十六年二月號所載「望月圭介先生を偲ぶ」より）

氣品を尙ぶ碁と云ひ、正道を履んで違へざらんとする着實一方の碁と云ひ、說破されて餘りなき批評であり、當然至極の棋風と思ふが、鳥渡安易に推測すれば、ごく激しいキビ〳〵した碁か、或はまた反對に極く穩かな、用意周到の碁であらうと想像されがちであらうと思ふ。

然し君が、氣品のある碁を、正道を履んで違はざらんとする碁を打たんと努めてゐたといふ處に、吾々は並々ならぬ君の心の嚴しさ、廣さ、美しさを、卽ち其處にこそ、まことの風雅のすがたをば見ることが出來るのである。

然し又それに捉はれてゐたゝめ弱かつたと云ふのは、その勝敗は問題外として、一面、君の圍碁の世界に於ける錬磨が、まだその淸元の場合に於ける如く、至藝の境地にまで行つてゐなかつたことにも依らう。然しながら政治家中の棋客としては、屈指の名手であつたことは云ふまでもない。

君との對局について、頭山滿氏は左の如く語つてゐられる。

「望月も私も碁を少し打つ、互先で打つてゐたが、丁度ヨイ勝負であつた。それから二十年もして、澁谷の無庵で犬養、望月、床次、鳩山、古島等七八人寄つた時、碁の話を始めて、望月が自分と打たうと云ひ出した。俺より一廻り年下であつたので、大分若い心算だから、望月が俺に云ふには、あなたは上られぬが、私は二三目は確かに上つた。瀨越などゝも打つてゐるから二三目置いて貰ひたい。と云ふ。俺は、それは上つても居らうけれども、互先で打つたまゝだから、やつぱり互先で打つて見て、勝つたらそれにつれて置かう。と握つた處が、俺が白を取つた。さうしたら俺が勝つた。望月笑つて、かういふ事はない筈ぢやが。と云つて何遍も打つたが俺が勝つた。碁といふものはさう上るものではない。又下らぬものぢや。俺は八十七になるが下らぬ。その後今日に至るまで互先ぢやつた。」（望月圭介閣下葬儀寫眞帖所載）

君はまつたく碁が好きであつた。それゆゑ彼が田中內閣に遞相として入閣した年の夏などは、縣人會

鄕友が主催にて、望月遞信大臣慰安圍碁會を、一日品川洲崎館に開催して、繁忙なる君を慰安したくらゐであつた。

然らば君自身多忙なる政治生活の寸暇を偷んでまで、圍碁に熱中してゐたかと云ふに、事實は左程ではなかつた。むしろ他人の對局を觀戰して、傍から辛辣無比な諧謔諷刺をとばして揶揄する時の方が多かつたといふ。それについて山下氏の語られるには、

「望月さんはあれだけの碁好きでありながら、一年も碁を打たれないことがありました。それはどういふ意味か判りませんが、それを私の方面から云はせれば、一歩始まつたら止まる處を知らない程の碁好きであるから、棋院へ來て後援はしながらも、自分では一石も置かなかつたのだらうと思ひます。自己を制御する力の强いのに感心してゐました。」（昭和十六年二月四日談）

或はこれも亦一面の眞相であつたかも知れぬ。

君がその他の趣味生活の面に於けると同く、斯界に於いても常にその新選手の發見、指導、後援を怠らなかつた。云はばそれは君にとつて趣味の趣味であつたのである。

それについて頭山滿氏は左の如き一例を語られた。

「望月はよく色々の世話をした。鄕里廣島から碁打ちの瀨越七段が出て來る時、望月が連れて來て、『あれは十七ですが三段打つ、東京へ來てイキナリ三段くれるなら碁打になる。くれなければやめる。』と云つて世話をし。

イキナリ三段になつた。」（望月圭介閣下葬儀寫眞帖記載）

然し彼の選手後援は啻に瀨越憲作氏のみにとゞまらず、その一門たる吳清源、橋本宇太郎、鈴木圭三等錚々たる諸君の、まだ少年時代より大いに之を嘱望し、激勵鞭撻に努めて來たのであつた。それらのことについては、後に掲ぐる瀨越氏の追弔談に讓るとして、まつたく斯界新人の育成には、さながら我事の如く心魂を打ち込んでゐたのである。

その瀨越憲作氏は雜誌「棋道」（昭和十六年二月號）に連載中の「棋士銘々傳」の中「多感の過去を顧みて」及び「望月圭介先生を偲ぶ」と題して左の如く君を追懷してゐる。

「（前略）ソコで明治四十一年、私が二十歳の秋、望月先生の政友會代議士として上京される時、私もお伴して愈々圍碁修業としての第一歩に就きました。（中略）かくて望月先生に連れられて上京するや、一先づ築地の有明館に投宿して碁界の消息を探りました。上京した四十一年の秋から、翌四十二年の春にかけて打つかつた棋士中、著名な人々は、本因坊秀哉、二代目中川龜三郎、關源吉、岩佐銹、野澤竹朝、鈴木爲次郎、高部道平、木村廣造以上の諸氏でしたが、中でも特に印象の深いものを擧げますと其の一は秀哉名人に打つて貰つた碁でしたが、其れは櫻田門外司法大臣官舍の一角に屹立する、銅像の主松田正久氏の所望で、麻布笄町の私邸に招かれ、或る寒い日に名人に三子を布いて對局したのが、夜の十二時頃までかゝつて幸ひ勝を得ました。その二は當時の常勝々軍鬼野澤四段に先番で見事に勝つた記憶です。其の三は高部道平四段との對局でした。運よく四目の勝を得ました。さて私の歸郷も追々切迫しますので、望月先生は是非とも私に三段の免狀を持たせて、

其れを故郷への錦に代へて遣りたいといふ御同情から、わざ〳〵嚴埼方圓社長を訪問され、上京以來の私の成績を擧げて三段の免許を要求されたのです、其の時嚴埼社長は『瀨越の成績は豫て聞及んでも居り、又其の棋譜も一覽はしたが、何さまだ垢抜けのせぬ田舍碁で、品位に缺けて居る點が多いから、お客段位ならともかくも、專門家としてなら二段の免狀しか與へられぬ、其れとも強て三段が希望なら、社の指定する棋士に依て檢定碁を打つがよからう』と、斯ういふので其の頃旭將軍の綽名で、青年棋士の間に雄飛して居た、鈴木爲次郎三段と先相先の六番碁を打つ事になりました、手合に先つて望月先生から、『之れぞ一生の運定めであるから、萬一此の手合に成功しなかつたら碁を諦めて國へ歸つて百姓でもしろ』とまで激勵されたお言葉は今も猶まざまざと底に殘つて居りますが、之れが私にとつては千鈞の力になつたのでした。そして其の結果は僥倖にも二對四の成績で、私が二番の勝越しとなつたものですから、ポツト出の田舍青年に一躍三段と云ふ輝かしい免狀が授けられ、望月先生に對する面目も立ちましたので、得意滿々で歸郷したのですが、私の今日あるのも偏へに望月先生のお蔭と存じ先頃の告別式に靈柩の前に跪きました時は、實に無量の感慨に打たれて落涙の滂沱たるを禁じ得ませんでした。

先生の圍碁に對する執心は夙に世人の知る如くであるし、私は碁を以て世に立つ者であるけれども、先生と私との對局はほんの數へる程しかない。一は私が毎日忙がしいからであり、先生もまた朝夕政界に馳驅されて、人一倍お忙がしい軀であつたからである。

先生と私との手合は五子であつた。先生の棋風は、謂ゆる政治家らしい覇氣縱横でなく、正道を履んで違へざらんとする著實一方であつた。棋風を通じて觀た先生は、政策の人でなくて正しい履踐の人であつた。

私が先生の知遇を得たことは、延いて私一門の淺からぬ緣故ともなつた。殊に吳淸源君など來朝早々から、非常にお世話になつたものであるが其の歸化に當つては、支那側の意嚮が捗々しくなかつた爲に、先生自身幾度かわざ〳〵外務省に出向いて、當時の駐日大使蔣作賓にも面談されたりした。吳淸源君の歸化が無事に運んだのは全く望月先生と菅野長知氏の盡力に依る處と云つても過言でない。

鈴木圭三少年を私の門に伴れて來られたのも、實は望月先生であつた。其の關係から圭三君に對しては寧ろ溺愛されるに近く、動やもすれば藥が利き過ぎて、政客や知友を其の邸に招き、圭三君が幾つも置かせて、而もコロリ〳〵と敗かすのを見ては、大いに快を遣つたりした。『君も碁さへ打たねば立派な男だが……』などと。今の七段橋本君が十四歳の時、私に手一ぱい三子といふのだから、迚も素人の敵手ではないが、先生は之れを百も承知の上で而も旨を含めて當時の衆議院議長、故奥繁三郎氏と對局させ、十六七番續けさまに敗かし、奥議長がカン〳〵になるのを見て喜んだといふチト罪な話さへある。其の奥議長が、ウキスキーの熱氣をプンプンさせながら『うん、この小俳少しは遣るわい』と云つたとかで流石の先生も呆れて居られた。松村義一氏も先生の此作戰に引ッかかつて、『しまつた、何の因果で君の處に來たらう、子供にいゝ加減に捻られて……』と、こぼしたとか。然るに先生自身の手合は極めて稀であつた。自信が無かつたからだらうとか、實力を他人に見られるのがいやだつたからだらうとかいふのは、故人の趣味性を冒瀆する——。とにかく人の打つのを觀ながら、盤側から警句、好謔をポツリ〳〵と發し、時に寸鐵人を刺す底の諷刺があつた。或時私が『段を差上げたいと思ひますが』といふと、先生は『飛んでもない、段でも貰つたら生涯碁石を握る事ができない』と云はれた。先生の御舍弟乙也氏は二段、廣島縣下では屈指の强手であるから、先生も明らかに一目讓つて居られた。

そこで再び或る時入段の話の出た折『弟が二段であるのに俺が初段になれるか、うん、弟か、アレは他に取柄はないが、碁は俺より一寸强い』と云はれた事もある。その『取柄のない』御舍弟が、歷乎とした縣政の重鎭であつた。(後略)」

尙、君の薨後、圍碁に關して左のやうな床しい話がある。

それは君の薨去の少し前のことであつたさうだが、或日君の胸像を作つた彫刻家の上田直次氏が來訪して閑談の折、碁の話が出て、君は「何か一つ、見たゞけで心のたのしくなるやうな碁笥が欲しいものだ。」といふと、上田氏は「よろしい、僕が一つ今までに例のないやうな素晴しい碁笥を作つて差上げませう。」と云つたので、君は「いや、素晴らしいと云つても、變に豪華なものを作つてくれては、肝腎の碁が打てなくなる。」と云ふと「大丈夫です、先生の氣持はよく判つてゐますから、まア任せておいて下さい。」と受合つた。然しその碁笥は君の生前には遂に出來なかつた。ところが十八年の秋のこと「やつと出來ました。先生のお目にかけられなくて殘念ですが、僕としては精一杯の作品です。どうか御靈前に供へて下さい。」と差出された品を見た時、家人は思はず目を瞠つた。それは實に見事な碁笥であつた。材は櫻で、胴の模樣には何れも兎が彫られ、蓋は一方は望月家の定紋たる五三の桐が彫られ、一方は轉法輪が彫られてあつた。兎はおそらく君が卯年の生れなることをあらはしたことゝ思ふ。とにかくその地肌と云ひ圖案と云ひ、彫法と云ひ、その澁い高雅な碁笥はまつたく君の性格をさながら象徵してゐるかの如くであつた。家人は非常に喜んで早速鄕里大崎島なる君の墓前にこの碁笥を供へたのであつた。別揭の寫眞がそれである。この床しい話は後に述べる兒玉希望氏の美擧と相俟つて君薨後の美談の双璧となつた。

書道

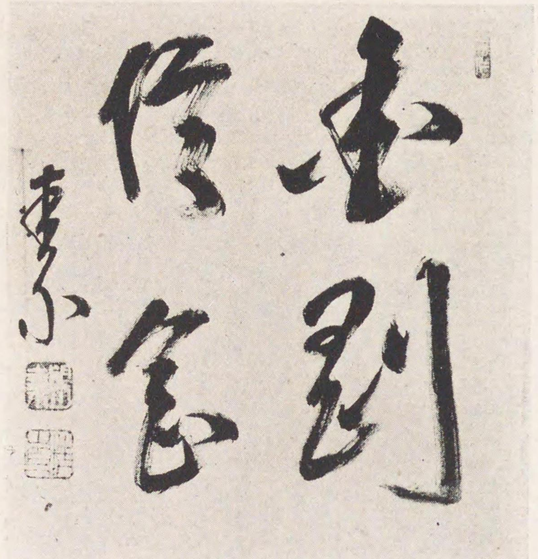
君の書は郷黨の間にあつて頗るこれを珍重してゐるが、その數は至つて少い。それほどの名筆家かと云へば決してさうではない。君自身、自分は書は頗る下手だ。拙劣だから書くのは嫌だと大抵の場合は之を拒絶してゐる。

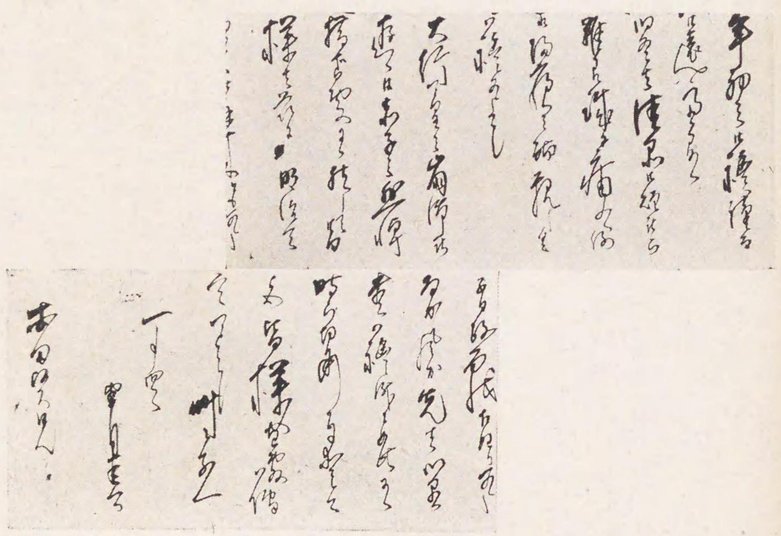
然らばそれほど下手かと云ふに、決してさうでもない。それは君の豐かな鑑賞力がさせるところの謙遜なのである。名筆家の部には入らぬが、とかく政治家の書にありがちな、わざとらしい氣取りやアテ氣は甚だ少い。かなりスツキリとした否味のない、いかにもキビ〳〵とした君の性格を丸出しにしたやうな書である。

そして書くと云へば大抵「精神一到貫於鐵」「馨香馥郁」「以信爲本」「金剛信念」等の語句を書いて與へた。

しかし滅多に書かなかつた。と云つて素氣なく斷るといふのではなかつた。何の彼のと君一流の言葉を以て拒絶するのであつた。それについて郷里大崎島の長福寺住職は左の如く語られた。

「何とかして先生の書を頂かうと思ひまして、本堂に書いて下さるやうに懇請しました處、『俗人が本堂に書くべきではない、お斷りします。居間なら書いてあげませう。』と態よく斷られました。『では居間に書いて下さ





望月翁の筆蹟

い。』『今は氣分が向かないから、東京へ歸つてから書いて送つてあげよう。』斯う約束して歸られましたが、その後何等の音沙汰もありませんでした。先生は滅多にお書きにならぬ方でした。」（昭和十六年六月二十四日談）

「俗人が本堂に書くべきでない。」と尤らしく斷つてゐるところなどは、君の面目躍如たるものがあるではないか。又君は遺に政治家らしく、相手に依つてその拒絶法も巧妙を極めた。

即ち同島國民學校々長の倉本正氏もその拒絶に會つた一人で、左の如く語られた。

「先生は滅多に書をお書きにならぬ方でした。然し何とかして本校の講堂の額を書いて頂かうと苦心しましたが、これは遂に失敗しました。私が先生に額を懇請致しますと『賴山陽の出てゐる處で俺などが下手な字を書かれるものか。』と言下に斷られました。」（昭和十六年六月二十八日談）

更に「東亞國政」（昭和十六年九月號）の所載記事には左の如く報じてゐる。

「その當時鄕里の人から望月先生の書を賴まれた。そこでその事を賴むと『一寸待て』と云つて立上つて奥へ行き、一卷の書を持つて來られた。之は有難いと思ふと、『君、そこを持つてくれ。』と他端を押へて擴げて見ると、七言絕句の詩三枚楷行草の三體に書き分けてあり、石州女史の落款がある。『何うだ。』とのこと、思はず『上手なものですなあ。』と感心すると、やをら書を卷いて曰く『石州女史は中年までは藝者をしてゐた原敬の妾である。かうした女でもこれ位上手である。余は到底及ばない故に余の書は書いてやれない。』是が謝絕の仕方であるが、如何にも手數の混み入つた望月式の方法であると感心したものである。」

因に君は雅號を桂崖と稱した。

その由來について郷友の岸本氏は左の如く語られた。

「望月さんは始め、原さんに昵懇の何とかいふ老人に、雅號を撰んでくれと頼んでゐました。或時私が望月さんの處へ泊つた時、望月さんは私に『弘洲』と『桂崖』の二の雅號を示して、どちらがいゝか擇んでくれと申されましたので、私は速座に『桂崖』がよからうと申しました。と云ふのは、桂は圭に通じますし、宇面にも何となく彼の風貌が出てゐますし、それに弘洲といふ雅號は廣島にも相當な人でつけてゐる人があるからです。それらの事を申しますと、望月さんは『では桂崖にしよう。』と申され、其後はずつと桂崖を用ひて居られました。因にその法名も大乘院殿釋桂崖明德大居士と申されます。」（昭和十六年四月二十九日談）

君の書簡は大體に於て長文のものが多く、しかもよく意をつくし情をつくし、懇切丁寧を極めたもので、殊にその身内に宛てたものは情味滾々として溢れ、そゞろその人柄の偲べるものであることは、すでに家庭の章にて紹介した如くであるが、書體又風趣あり、政治家の尺牘として珍品たるを失はぬものであらう。次に君が、その家の風を喜び、その家庭の人全部を愛してゐた廣島市大手町の菓子舗本田屋こと本田鶴藏氏に送つた手紙及び奥山氏宛の二通を寫眞として別掲する。

因みに此の本田一家とは、君が原内閣當時政友會の幹事長として縱横の活躍をしてゐた頃からの知り合ひであり、頗る醇風積善の家であつた。然して何より君の心を滿したのは、此の一家が非常に睦まじく殊に親に對して孝養の厚いといふ處にあつた。いかに君が此の家を愛したかは、彼が最後の歸郷となつた昭和十五年秋の時にも、自ら親しく本田屋を訪れ暫時を家族の者と談笑に過したと云ふほどであつた。その時君は『これがお暇

乞ひかも知れない。』と云つて本田屋を辭したさうで、本田屋の人々はその言葉に何となく不安を感じ、それより朝夕彼に恙なき事を祈つてゐたさうであるが、遂に數ケ月の後彼は不歸の客となつたのであつた。君がいかに此の家の人々を愛してゐたかは、この書簡にもよく現れてゐる處であるが、本田一家も亦君の愛顧を頗る德として『今後は一層閣下の御教訓を體しまして、成るべく正しい生活を營み、御生前の御愛顧にお報い申上げたいと思つて居ります。』と力強く語るのであつた。（昭和十六年十月廿六日談）

骨　董

名士に書畫骨董の趣味は附き物であるが、君にはさうした趣味がなかつた。少くとも道樂としての骨董趣味は全然なかつたのである。君の如き豐かな感覺と鑑賞眼を持つ者が、骨董の道樂に赴かなかつたといふことは、一見洵に不思議な感じがするが、これは恐らく骨董趣味にまつはる一種の賤人根性、卽ち物慾に捉はれることを厭つたからではあるまいかと思はれる。

それについて大石夫人は左の如く語られた。

「父は書畫骨董の趣味には全然興味がないやうでございました。從つて骨董屋さんの出入りは見た事がございません。それでも人樣から頂いたものや、仕方なしに買はされたものなど數は相當ございましたので、或時、父に『隨分澤山ありますのねえ』と幾分欲しさうに申して見ますと、『欲しかつたらお前らはお前らで買うたらえゝ』と申しますので『ひどい事を仰有る。さう云つたら少しは下さるものですよ』と申しますと『馬鹿ア云へ、

われらに遺られるかい。こりやア儂が死んだらみんなに形身に分けてやらんにやアならんのぢや』と申しまして一本も呉れませんでした。こんな處はまつたく頑固でございました。それで私も、父が亡くなりました時、遺言通り、いゝ悪い無しにその書畫類は殆ど全部形身として分けてさし上げてしまひました。今この家に殘つて居りますのは十本ばかりでございませう。たゞその中で父が大切にいたして居りましたのは、伊藤博文公の書の屏風でございまして、これは伊藤公のものとしましても珍しい大作ださうで、大岡育造様から傳來の品でございます。もう一つは西園寺公から頂いたといふ、公が御自分の詩をお書きになつたものでございまして、この二品だけは大切にいたして居りました。畫家のお方達では池上秀畝畫伯と兒玉希望畫伯とが好きで、お附き合ひもあるやうでございました。」（昭和十七年六月二十五日談）

因に池上秀畝氏は故大岡育造氏の親戚であり、兒玉希望氏は廣島縣高田郡の出身であるといふ關係からであつた。殊に兒玉氏との交誼は親密で、君が生前一時窮境に臨んだ兒玉氏を後援するの意味に於て、前金を手交し繪畫製作を依頼した事があつたが、完成を見ずして君は逝つた。固より家人は一切さうした契約を知らなかつたが、生前の厚誼に感激した兒玉氏は、病中を押して、君の三周忌繰上げ法要の前日までに「光被八紘」と題する檜と杉とに双鷹を描いた六曲一双のいとも見事なる金屏風を搬納したのであつた。而してこれは時價として君が手交した金額以上の作品であつた。この話を傳へきく人々は今更ながら君の義氣と兒玉氏の美擧を讃嘆し、政界、畫壇近來の佳話であると喧傳してゐる。

以上の如く、多方面に亙つて趣味の汎い君は、よくさうした人に陷りがちな廣く淺い趣味人でなく、

相當深奥の妙處にまで參堂味到してゐたことは、既に述べた處の君の言行によつて、よく諒解される處と思ふが、まつたく君の感覺は鋭敏且つ纖細であつた。

いかに君の好みが洗煉されたものであつたかについて、かうした話がある。

即ち乙也氏夫人は

「兄が内務大臣として御大典に奉仕いたしました後、此處へ墓詣りに戻つて參りました時でございます。この父の墓の臺座の㊤に黒く墨が入つて居りましたのを見まして、そのやうな下品なことをするものではない。と大へん機嫌が悪う御座いました。墓にはよく紋所などに墨を入れるものでありますが、兄は、それは下品ぢや、無地がよい。と申しますので、早速洗つて墨を抜いたやうなことでありました。」（昭和十七年三月二十八日談）

と語られた。

君にはこのやうに放つておいてもさして差支ないやうなことでも、自分の趣味に合ぬことには、之を改めさせねば氣のすまぬ人であつた。この邊の感情はさながら氣難しい藝術家のそれのやうであつた。藝術家に見られる感覺を持つてゐながら、骨董を買つてその感覺と、所有物の自慢をすることの一切なかつたことは、實に明瞭に君の性格を表現してゐる。

又これをも趣味の一つと云へるかどうか疑問であるが、君はよく辛辣な皮肉を云ひ諷刺を飛ばし諧謔を弄するのを好んだと云ふ。しかし今日ではたゞ『皮肉な人であつた』とか『悪口の名人であつた』と

か『滑稽なことを云ふ人であつた』とか云ふのみで、その具體的な逸話を記憶して居られる人が少いのであるが、ともかくもその例として敢て重復を厭はず之を述べれば、前記小坂順造氏の追懷中にもあつた如く、權門のみを目あてに歩き廻つてゐる人を指して『あゝ、あれは日向を歩くのが好きな男でな』と云つたあの皮肉。又自己の清貧を自嘲して「わしは幼少の頃、よく母親から買喰ひをするな、買喰ひをするなと誡められたから、この訓誡は守つたが、その代りたうとう財産を賣喰ひしてしまつたよ。」と云つて呵々大笑したといふあの諧謔。或は又、君が歸縣した際、或人が、當時着任早々の時の某知事の爲人を質すや『ウーム、あれは軒下の煙草店よ』と即答したが、質問者其意を解せず更に問ふので、曰く『見かけはいゝが奥行がない』と云つたといふ。

更に又栗原源藏氏は當時を追懷して左の如く語られた。

「望月氏とは大正の初め頃、原敬氏の紹介で友人になり、心易くしてゐました。最晨にしてゐた上田直次といふ彫刻家の彫つた羊が、望月の家の縁側に置いてあつた。私が遊びに行くと、君の處は廣いからこれを持つて行かぬかと云ふ。こんな立派なものを貰ふのは悪いから買はうぢやないかと云ふと、買ふのなら上田に金をやつて別に頼めと云ふ。では胸像でも彫つて貰はうかと云ふと、彼はニコリともしないで『それだけは勘辨してくれ、この人は上手だから、君の通りに彫つてしまふから、後で君の機嫌を損じると大變だ。』と云ふので奥さん始めみんな大笑ひをしたことがあります。」

是等の話を通じて見ても、いかに君が諷刺諧謔を好み、又その語句のいづれもに、如何にも君らしい深い風趣がよくあらはれてゐると思ふ。

又その悪口の巧さについて、大石夫人は左の如く語られるのであつた。

「父は嚴格な一面、時には大へん面白いことを申して笑はせました。又悪口の上手な人で、自分でその悪口を樂んでゐるやうな傾きがありました。ほんとに怒つてゐる時の悪口でも、後から思ひ出して見ると、噴き出すやうな上手な悪口でございました。今すぐこれと云つて思ひ出すのも難しうございますが、左樣、このやうな事がございました。父は孫の哲太郎をそれこそ目の中へ入れても痛くないほどの可愛がりやうで、『哲太郎の教育は儂がするから、お前たちは口出しをしてくれるな。』と申すほどでございましたが、私も親ですからさうさう默つても居られませず、悪い時には叱りますが、或時、哲太郎が、どうしたことか登校間際にダヾをこね始めまして、女中達を手こずらして居ります。丁度私は着物を着替へて居りましたが、時計を見ますともう時間が切れ〳〵なので、すつかり慌てゝ長襦袢のまゝ其處へ駈けてまいりまして『學校へ遲れたらどうします。』と叱つてをりますと、いきなりむんずと衿髮を摑まれたので、びつくりして振り返りますと、父が怖い顏をして『何ぢや、田舍芝居の瀧夜叉のやうな恰好をして、見つともないざまをすな。われが哲を叱るより、儂がわれを叱りたいわい。』と大變な權幕で叱られました。しかし田舍芝居の瀧夜叉とは上手な悪口だと後で大笑ひになりました。父の悪口はざつとこんな風のものでございました。」（昭和十七年六月二十五日談）

この逸話など、君がかゝる場合の女性の長襦袢姿について、下品な方の悪口に持つて行かず、咄嗟の

場合にも直ぐ〻嵯峨や御室……で有名な「將門」の瀧夜叉へ持つて行くといふ處に、いかに君が邦樂通であり、且つ言葉に對するセンスの洗煉さが偲ばれて、二重に床しいことゝ思へるのである。

又君がよく怒りよく涙するところの感情家であつたことは、既に幾度か述べて來たが、大體は頗る樂天家で、從つて又大の惡戯好きであつたといふ。君の惡戯は文字通りの惡戯でなく頗る風趣に富み洒脫な味の深いものであつた。

今日傳つてゐるさうした逸話は、數は甚だ少いが、丁度前に述べた揮毫拒絕の手法の如く、頗る入念、手數のかゝつたものであつた。

それについて同じく栗原源藏氏は、左の如き興味深い逸話を語られた。

「望月さんが內務大臣の頃でしたが、誰か九官鳥を拾つて警視廳へ屆け、然もそのことを新聞へ廣告したことがあつた。處が偶〻、望月さんが昔から贔屓にしてゐた或る待合へ行つた處、そこの娘がその九官鳥をほしがつて望月さんに『先生、警視廳へ行つてその九官鳥を貰つてくるのには、どういふ手續きをしたらいゝのか敎へて下さい。』と賴むと、望月さんは何にも云はずにすぐ『勘定をしてきてくれ、今迄の勘定を皆してきてくれ。』とニコリともしない。皆は內務大臣に九官鳥の事などを聽いたので怒つたのだと思つた。すると望月さんは更に『しばらくお前の處へは來られぬ。』と云ふので愈〻皆は心配して機嫌をとり、一方私に來てくれと呼ぶので行つて見ると、さういふわけで、座敷には一流の藝者がズラリと竝んでゐながら、シーンと靜まり返つてゐる。女將が私に何とか執成してくれと云ふので、私がわけを訊ねると、『こゝの女將も、亡くなつた親父も、

大變なおしやべりなので、それに出來た娘は更におしやべりだ、その上九官鳥にまでしやべられては大變だから、もう此處へは來られんのだ。』と眞顏で云ふので、一同は腹をいたくするほど笑つた。」

又同じく君の洒脫なる惡戯について、割烹店かめ清の女將は左の如く語られた。

「私が一番先生を洒落氣のある方と思つたのは、手前共でやつて居りました毎月の二十日會、あれで誰方がさういふことを言ひ出されたのか、多分內田さんなんかだらうと思ひますが、幹事さんが御都合を訊いて『來月はあなたさんですよ。』『よろしい。』と仰しやつた幹事は、その自分の當番の時に幹事さんがいらつしやらぬと來たお客樣が勝手に土產物を注文して持つて歸る、ですから幹事が時間を遲れるやうなことがあると、五時になると皆さん、そら幹事が來ない、早く內儀さんお土產を出せ、何にせい〳〵と仰しやる。いつか四月だつたと思ひますが、望月先生が幹事だつた、さうすると前の日の十九日に京都のお宿から電報を打つて來て、『明日の二十日會にはどうしても出られぬ、一同に土產物を賴む、ヨーヨーを一箇宛然るべく表裝をして差上げろ。』と電報用紙一ぱいに書いてある。その時分にヨーヨーが大變流行つて居りました。しかし望月さんがヨーヨーを一箇宛差上げろと仰しやつても、一體ヨーヨーは幾ら贅澤なのでも二十錢も出せば上等のがある。どういふお考なんでせう、だが電報でさう言つて來られたのだから出さなければならぬ。ところがその頃ヨーヨーはもう廢りかけた時分で街には餘りない、デパートに行けばあるといふので二十日の朝早く三越に行つて訊いて見るとある、けれども一箇八錢なんです、もつと上等のはないか、これだけですと言ふ。幾らなんでも唯だの八錢のお土產物ではと思つたですが、仕方がない。それで賣場に行つて『之を立派な箱に入れて何箇下さい。』と言ふと、『何時までにですか。』『今夜までに欲しいのです。』『それではちよつと困りますが……。』『どうしても今晚欲

しいのですから何とか間に合はせて下さい。』といふわけで、桐の箱に入れて貰つて、家に歸つて來た、ヨーヨーが八錢でお化粧に二十何錢掛つた、それで家で紙で包んで差上げるやうに用意をして置きました。すると夕方皆さんお出でになつて、『今日は望月は來ないだらう、俺は土産を貰ひに來た、俺に何にしようかにしよう。』と言ふ。『いえ土産物が屆いて居ります。』『何處から屆いて居る？』『東家さんから屆いて居ります、お歸りにお持ち歸りになりますやうに玄關に置いてございますから……。』『どんな土産物か。』と言つて箱をちよつと振つて見るとコト〳〵と音がする、皆さん鈴の玉だとお思ひになつたらしい、『一つ開けて見よう。』『いえ此處で開けてはいけません、お宅へ歸つて奥様の居る所で開けると一番喜ぶお品らしいですよ。』といふやうなわけで、お持ち歸りになつた。翌る月の時に『實に人を馬鹿にしてをる……。』と言つて皆さん大笑ひなさいました。」

（昭和十六年五月五日談）

以上趣味を通じて見たる君の特徴は、此章の冒頭に述べた如く、その對象のあくまで庶民的なことであり、その味ひ方のきはめて嚴しいことであり、その好める選手に對する偏愛ぶりである。

或は人によつて、その對象、態度については之を尊敬するも、最後の選手偏愛の如きは、君子の趣味として首肯致し難いものとして、或は顰蹙される向もあるかも知れぬが、啻に藝道に限らず凡そいづれの方面に於ても、その道を好むに至れば自然と斯道に精通する。精通すれば必ずそれに携はる人に興味を持つ。さすれば何人と雖も其處にいはゆる贔屓の生れてくるのは人情であつて、その後援の精神的であると物質的であるとを問はず、後援選手の有無に依つて、斯道に對する興味關心に格段の相違が生ず

るのも亦儼然たる事實である

然らば況してや君の如く、天眞爛漫の感情家にして、且つ斯界を愛すること深く、殊更に人事に關心を持つ君が、つい選手偏愛に陷ることも已むを得ざる成行であつて、むしろ其處にこそ君の君たる人間味を熟知せねばならぬのである。

年

譜

慶應三年（一歳）

二月二十七日廣島縣豐田郡東野村七百六十七番地（通稱大崎島矢弓）に望月東之助三男として生る。三郎と稱す○祖父善三郎七十五歳、父東之助四十歳、母リツ三十二歳、兄俊吉十二歳、姉スワ四歳。

正月明治天皇御踐祚○十月大政奉還奏上○十二月皇政復古大號令。

明治元年（二歳）

正月伏見鳥羽の戰○八月明治天皇御卽位。

明治二年（三歳）

三月東京行幸、皇都と成る○五月函館平定。

明治三年（四歳）

七月七日妹イツ生る。

九月平民に姓を許す○人力車、メリヤス、自轉車國產靴等出現。

明治四年（五歳）

正月郵便制度創設○二月大阪造幣寮落成○七月廢藩置縣○十二月日澳條約締結。

明治五年（六歳）

二月兵部省を廢し陸海軍二省となる
○十月東京横濱間鐵道開設○十二月太陽曆に改む

明治六年（七歳）

一月全國に徴兵令○九月十三日征韓論敗る。

明治七年（八歳）

一月十七日妹フヱ生る。

二月佐賀の亂○四月臺灣征伐○十月阪神間鐵道開設○是歳板垣退助等愛國公黨を組織し尋で解散す。

明治八年（九歳）

四月マツチ製造開始○十月邏卒を巡査に改む。

明治九年（十歳）

九月二十八日弟乙也生る。

三月帶刀禁止令○六月奥羽御巡幸○十月熊本及び萩に亂起る○十一月京濱間に電話試設。

明治十年（十一歳）

二月西南役起り、九月平定○赤十字社を設く。

明治十一年（十二歳）

五月大久保利通刺さる○八月東北御巡幸○八月竹橋騒動。

明治十二年（十三歳）

三月東京府會開く○八月十三日　嘉仁親王御降誕。

明治十三年（十四歳）

春兄俊吉竝に家庭教師伊達行平と共に上京し直に芝新錢座なる元慶應義塾跡なる攻玉社に入學し同寄宿舍に入る。

二月内閣と諸省分離○四月片岡健吉等國會開設建白書。

明治十四年（十五歳）

三月攻玉社炎上○此年共立學校へ轉校歟。

十月國會開設の詔下る○同廿一日内閣更迭。大隈重信諭旨免官○同廿九日自由黨結黨式神國井生村樓に擧げらる。

明治十五年（十六歳）

祖父善三郎歿す行年八十九歳。

二月東洋議政會起る○三月大隈等立憲改進黨結黨。立憲帝政黨亦起る○四月七日板垣遭難○七月朝鮮暴徒我公使館を襲撃す○八月日鮮媾和條約締結。

明治十六年　（十七歳）

共立學校を卒業す○明治英學校へ入學歟○兄俊吉金玉均に隨ひて渡鮮歟。

明治十七年　（十八歳）

五月二十七日圭介と改名す○此頃遊學を廢し長崎に赴き叔父源九郎と共に家業なる高島炭坑の石炭廻漕の業務に從ふ○九月兄俊吉金玉均との契約の下に朝鮮欝陵島に於て伐木造船の業に從ふ。十二月金玉均政府倒壞に依り歸國歟。

明治十八年　（十九歳）

八月伊藤博文憲法取調を終りて歸朝○九月河野廣中入獄○十二月內閣更迭。

三月憲法制度取調局設置○三月地租條例制定○九月加波山暴動○十二月自由黨解黨○十二月朝鮮閔黨我公使館を襲擊す。

明治十九年　（二十歳）

四月天津條約締結、日淸共に朝鮮駐兵を撤す○十二月二十二日內閣設置、第一次伊藤內閣成立○大井憲太郎等朝鮮に赴き事を起さんとし捕へらる。

三月元老院官制改革○五月條約改正會議第一會開會○十月ノルマントン號紀州沖に沈沒。

●九月四日近藤眞琴五六

明治二十年　（二十一歳）

四月伊藤博文鹿鳴館にて舞踊會を開く○五月叙位條令發布○八月板垣時弊十餘條の奏上あり、國事に關し有志者の建白演說集會等多し○十二月保安條令發布、五百七十餘名に對し東京退去を命ず。

四月二十八日樞密院を置き伊藤博文初代樞府議長となる○四月三十日黑田內閣成立○七月後藤象次郎大同團結のため諸國遊說○十月日墨條約締結。

明治廿一年　（二十二歳）

四月長崎より瓜生茂を伴ひて歸鄕し望月家へ養子として入藉せしむ○七月十七日、姉村上スワ歿す年二十五歳。

明治廿二年　（二十三歳）

二月十一日憲法發布、議院法公布○九月條約改正建白書を提出○十月十八日大隈重信遭難○十二月二十四日第一次山縣內閣成立。

明治廿三年　（二十四歳）

七月一日第一回衆議院議員選擧施行○七月十日第一回貴族院議員選擧施行○八月廿五日立憲自由黨結黨○十月三十日教育勅語渙發○十一月二十五日第一回帝國議會開會。

明治廿四年　（二十五歳）

一月十九日板垣等自由黨を脫す○一月廿日兩院燒失。三月八日第一帝國議會開院式○三月廿日立憲自由黨、板垣を總理に推し自由黨と改稱す○五月六日第一次松方內閣成立○五月十一日大津事件○十月濃尾大地震○十二月二十五日第二議會建艦費問題其他にて解散。

●二月十八日三條實美五十五。

明治廿五年　（二十六歳）

八月妹フヱ溫田家へ嫁す。

二月十五日第二回總選擧○五月六日第三議會開會六月十五日閉會○八月八日第二次伊藤內閣成立。

明治廿六年　（二十七歳）

一月內閣不信任案上奏停會と成る○二月十日和衷協同の勅語を賜ひ六年間增艦費の一部に每年宮廷より三十萬圓御下賜の御沙汰下る○三月第四議會開會○十月官制改革發布○十一月二十五日第五議會開會○十二月卅日對外交問題其他にて議會解散。

明治廿七年　（二十八歳）

香川縣寒川郡津田村上野甚二郎二女ハルと結婚す。

三月一日總選擧○三月二十八日金玉均上海にて殺さる○五月三日立憲革新黨成立す○五月十五日第六議會開會○六月二日失政上奏案にて議會解散○七月廿五日豐島沖に支那軍艦高陞號擊沈○八月一日日淸役宣戰○九月一日總選擧○十月十五日廣島大本營にて第七議會開會○十一月二十二日旅順港陷落○十二月二十二日第八議會開會。

明治廿八年　（二十九歳）

十一月二十八日ハルとの結婚屆出、此年內に離緣歟○此年の秋廣島縣々會議員商業會議所會員等十數名と新領土臺灣に視察に赴き熱病に罹る。

三月二十四日下關に於て李鴻章遭難○四月十八日日淸媾和○三國干涉起る○六月臺灣總督府開設○十月八日閔王妃暗殺事件起る○十二月三日遼東還附○十二月廿八日第九議會開會。

●三月十三日井上毅五十二●四月二十四日河野敏鎌五十二

明治廿九年　（三十歳）

八月廿八日第二次伊藤內閣總辭職○九月十八日松隈內閣成立○十二月二十二日第十議會開會。

明治三十年　（三十一歳）

九月二十一日ハル離縁屆出。

此年安藝郡燒山村富永正男長女チサトと結婚す。

明治卅一年　（三十二歳）

三月十五日施行の第五回總選擧に自由黨より立候補し落選す○八月十日施行の第六回臨時總選擧に立候補し當選す、爾來自由黨に所屬す。

明治卅二年　（三十三歳）

四月足尾鑛毒問題起る○六月布哇政府我移民の上陸を禁止す○十二月廿五日內閣不信任案にて解散。

●八月四日後藤象次郎六十●八月二十四日陸奥宗光五十四

一月二日第三次伊藤內閣成立○三月十五日總選擧○五月十四日第十二議會開會○六月十日增稅案否決問題にて議會解散○六月廿二日進步自由兩黨合同して憲政黨を組織す○六月三十日板隈內閣成立○八月十日再び總選擧○十月二十九日憲政黨中舊自由黨分離して別に憲政黨を組織す○十一月三日憲政黨中の舊進步黨憲政本黨を組織す○十一月八日第二次山縣內閣成立。

十一月廿日第十四議會開會○七月五日帝國黨結黨

明治卅三年　（三十四歳）

此頃清元お葉の門に入り清元淨瑠璃を習ふ。

●一月廿一日勝安芳七十七●九月廿六日大木喬任六十九

五月清國義和團起る○八月立憲政友會成る○十月十九日第四次伊藤內閣成立○十二月大隈憲政本黨總理となる○十二月星亨遞相を辭し原敬之に代る。

●一月廿六日品川彌次郎五十七●八月二十三日黑田清隆六十一

明治卅四年　（三十五歳）

六月五日地方遊說部の一員に指名さる。

六月二日第一次桂內閣成立○六月星亨刺殺さる年五十二○九月伊藤外遊○十二月田中正造足尾問題にて直訴を計る。

●二月三日福澤諭吉六十八●十二月十二日中江兆民五十五

明治卅五年　（三十六歳）

二月二十八日チサトとの結婚屆出○七月十四日長女委子出生○八月十日第七回總選擧に立候補して落選。

明治卅六年　（三十七歳）

三月一日第八回總選擧に立候補して當選○四月二十八日茂を離縁す○七月八日父東之助歿す行年七十六歳○六月二十六日政友會の政府との妥協を慨して同志六十名と共に脫會す○十二月三日脫會者中尾崎小川等有志十九名と共に無名倶樂部（同志研究會）を組織す。

明治卅七年　（三十八歳）

三月一日第九回總選擧に立候補して落選○八月十一日二女チエ出生。

明治卅八年　（三十九歳）

三月同政會（無名倶樂部）解黨○三月二十二日横濱よりマンチュリヤ號に乘船し布哇に赴く。卽ち軍人遺族援護寄附金募集の爲なり。○政友會に復歸す。一月一日旅順開城○三月十日奉天開城○五月二十七日日本海海戰○八月十日日露媾和談判委員ポーツマスにて會見す○九月五日日露媾和○同六

一月三十一日日英同盟結成○八月十日第七回通常選擧○十二月二十八日海軍擴張資源問題否決にて議會解散。

五月政府政友會との妥協整ふ○六月政友會土佐派を中心に少壯派脫會○七月伊藤政友會總裁を辭し再び樞相となり、西園寺公望侯政友會總裁となる○十二月十一日對露問題にて議會解散。

●十月三十一日片岡健吉六十一

二月十日日露國交斷絶宣戰布告○三月一日第九回臨時總選擧施行。

明治卅九年　（四十歳）

日日比谷燒打事件○十二月伊藤韓國統監となる。

●一月三十一日副島種臣七十八

一月七日第一次西園寺內閣成立○十一月滿鐵設立。

●七月二十四日兒玉源太郎五十五

明治四十年　（四十一歳）

七月一日三女三重子出生。

明治四十一年　（四十二歳）

五月十五日第十回總選擧に立候補して當選す。

明治四十二年　（四十三歳）

一月十九日政友會中國團體指名の協議員となる○十二月二十日政務調査會役員第五分科理事となる。

一月大隈憲政本黨總理を辭す。

五月十五日第十回臨時總選擧政友會大勝○七月十四日第二次桂內閣成立○十月十三日戊申詔書下る。

四月日糖事件起る○六月伊藤韓國統監を辭し樞相となり十月廿六日ハルビンに於て遭難薨ず年六十九○十一月山縣樞府議長となる○清國宣統元年

明治四十三年　（四十四歳）

五月十六日鐵道港灣に關する調査員となる。

明治四十四年　（四十五歳）

三月國民黨結黨式○六月幸德秋水等大逆事件發覺○同月韓國併合○十一月三日帝國在鄕軍人會創立。

八月三十日第二次西園寺內閣成立○十月支那武昌に革命起る○十二月東京市電車大同盟罷業あり。

●十一月二十六日小村壽太郎五十七

大正元年　（四十六歳）

五月十六日第十一回通常總選擧に立候補して當選○十二月二十三日院內幹事に指名さる○此年頃三土島田等の議員有志と支那を視察す。

七月三十日明治天皇崩御寶算六十一○九月十三日明治天皇御大葬○是日乃木希典夫妻殉死す年六十四、五十四○十二月二十一日第三次桂內閣成立。

大正二年　（四十七歳）

十月一日妻チサト別府溫泉にて歿す行年三十七歳。

一月桂新黨組織覺書を發表○內閣彈劾による議會停會三回に及ぶ○二月二十日第一次山本內閣成立○十二月立憲同志會結黨式加藤高明總裁となる。

●七月十日林薰六十四●十月十一日桂太郎六十八

●十一月廿二日德川慶喜七十七

大正三年　（四十八歳）

三月二十七日政友會幹事となる○十二月十日政友會政治調査員役員理事となる。

一月シーメンス事件起る○四月十六日第二次大隈內閣成る○四月十一日昭憲皇太后崩御○六月原敬政友會總裁となる○八月歐洲大戰起り廿三日日本も對獨宣戰布告○十一月七日青島占領○十二月二十五日朝鮮增師案否決にて第三十五議會解散。

●三月四日松田正久七十

大正四年　（四十九歳）

一月十一日政友會選擧委員に指名さる○三月二十五日第十二回臨時總選擧に立候補して當選す○五月十五日院內幹事に指名さる。

一月十八日對支二十一ヶ條交涉開始○三月二十五日第十二回臨時總選擧、政友會慘敗○六月二ヶ師團增師案通過○十一月大正天皇御卽位式行はる。

●九月一日井上馨八十一

大正五年　（五十歳）

三月一日政友會幹事、及び黨務委員會理事に指名さる○六月十四日母リツ歿す行年八十一歳。

護憲運動起り六月三黨首會合○十月九日寺內內閣成立○憲政會成り加藤高明總裁に推さる。

●十二月十日大山巖七十五

大正六年（五十一歳）

一月院内幹事に指名さる○四月二十日第十三回臨時總選擧に立候補して當選す○六月十九日政友會筆頭幹事、政務調査會役員理事に指名さる○十月一日黨務員會理事に指名さる。

此年長女委子上京し圭介と共に暮す。此頃芝區田町九丁目四十四番地に在住す。

大正七年（五十二歳）

三月二十八日政友會筆頭幹事に指名さる○九月衆議院代表シベリア出征將兵慰問團々長として渡西す○十月一日政友會幹事長に指名さる○十一月十九日兄俊吉歿す年六十三歳。

大正八年（五十三歳）

三月二十八日政友會幹事長（第二回）に指名さる。○此頃芝高輪泉岳寺下車町四四番地の家に移轉す。

一月二十五日內閣不信任案にて第三十八議會解散三月露國革命起る○四月第十三會臨時總選擧○十月露國レーニン政府成る。

●八月二十一日奥田義人五十八

七月シベリア出兵○八月各地に米騒動起る○九月二十九日原內閣成立○十二月世界大戰終る○同月西園寺公望媾和全權大使として渡歐。

●九月三十日大浦兼武六十九

二月國際聯盟規約成る○八月朝鮮臺灣總督文武官併用に改正○六月日獨媾和調印。

●七月十六日板垣退助年八十三●十一月三日寺內正毅六十八

大正九年（五十四歳）

五月十日第十四回臨時總選擧に立候補して當選す○七月三十一日政友會總務委員に指名さる○九月十日農商務省參事官に任命さる○十一月九日臨時財政經濟調査委員に任命さる。

大正十年（五十五歳）

一月十日平和克復の大詔下る○二月二十六日普選法案にて第四十二議會解散○三月十三日尼港虐殺事件○五月十日第十四回臨時總選擧、政友會絶對多數となる○十月國勢調査行はる。

三月三日東宮殿下御外遊御出發○十一月四日原敬暗殺さる年六十六○同十三日高橋是清首相及び政友會總裁の任を襲ふ○十二月米國ワシントンに軍縮會議開催さる。日本代表として加藤友三郎大將其他出席す。

●十二月林有造八十

大正十一年（五十六歳）

三月二十八日農商務省參事官依願免本官○六月十五日政友會幹事長（第三回）に指名さる○八月五日兄俊吉長女ふじを養女とす。

三月革新クラブ成る○六月十二日加藤（友）內閣成立○九月國民黨解散。

●一月十日大隈重信八十五●二月一日山縣有朋八十五

大正十二年　（五十七歳）

三月二十八日政友會幹事長（第四回）に指名さる○十二月八日長女委子大石主計と結婚す。

四月一日郡制廢止○四月二十四日武藤山治等實業同志會を組織す○九月一日關東大震火災○九月二日第二次山本内閣成立○十二月虎の門事件起り内閣引責總辭職。

●八月廿四日加藤友三郎六十三●十一月十四日島田三郎六十二●十二月廿九日河野廣中七十六

大正十三年　（五十八歳）

二月一日政友會選擧副委員長に指名さる○五月十日第十五回臨時總選擧に立候補して當選す。

一月七日清浦内閣成立、輿論沸騰○一月十五日政友會内閣否認を決議し、反對なる床次等脱黨政友本黨を作る○一月三十一日内閣不信任案にて第四十議會解散○五月十日第十五回臨時總選擧、護憲三派勝つ○六月十一日護憲三派内閣成立、加藤高明首相となる○八月政務官制公布。

●七月二日松方正義九十

大正十四年　（五十九歳）

四月一日政友會筆頭總務に指名さる。

○四月高橋是清農相及び政友會總裁を辭し、田中義一總裁に推さる○八月憲政會單獨内閣成立○九

月貴衆兩院燒失○三月三十日農商務省を農林省商工省に分つ○五月五日普通選擧法公布○五月十四日政友會革新倶樂部中正會合同。

●二月四日横田千之助五十六●四月十四日平田東助七十七●九月二十五日濱尾新七十七●十二月二十二日岡野敬次郎六十一

昭和元年　（六十歳）

一月二十八日若槻内閣成立○十二月社會大衆黨結成○十二月二十五日大正天皇崩御。

●一月二十八日加藤高明六十七●同、三浦梧樓八十一●二月十四日大木遠吉五十六●九月十四日早速整爾五十九

昭和二年　（六十一歳）

四月二十日田中内閣成立に伴ひ遞信大臣に親任せらる。叙從三位勳二等。

二月二十七日大正天皇御大葬行はる○四月二十日田中内閣成立○六月一日民政黨結黨濱口雄幸總裁。

●二月野田卯太郎七十五

昭和三年　（六十二歳）

五月二十三日内務大臣就任。

一月二十一日内閣不信任案にて第五十四議會解散

一月議會解散と共に政友會選擧相談役に指名さる○二月二日第十六回臨時總選擧に立候補して當選す○三月大口大藏次官を伴ひて大阪に赴き武藤實業同志會長と會見政策協定につき懇談す○六月廿九日緊急勅令として治安維持法中改正法律案を公布す○十一月御大禮御警衛に盡瘁す。

昭和四年（六十三歳）

七月二日田中内閣總辭職に依り内務大臣を辭す。

昭和五年（六十四歳）

二月二十日第十七回總選擧に立候補して當選す。四月三十日三女三重志田了介と結婚す。

○二月二十日第十六會臨時總選擧、（第一回普選）無產黨八名當選○三月十五日日本共產黨檢擧○四月政友會と實業同志會との政策協定成る○五月濟南事件○六月張作霖爆死事件○八月床次民政黨を脫し新黨倶樂部を組織す○十五ヶ國條約調印○十一月十日御即位御大典行はせらる。

●二月七日九條武子四十二

三月勞農黨代議士山本宣治刺殺さる○四月十六日共產黨檢擧○七月二日濱口内閣成立○七月五日新黨倶樂部政友會に合同す○九月田中政友會總裁急死、十月七日犬養毅後任總裁となる。

●八月三十日箕浦勝人七十六

一月十一日金解禁實施○一月二十一日與黨小數の爲め第五十七議會解散す○二月二十日第十七會臨時總選擧。民政黨多數○四月ロンドン軍縮會議。

昭和六年（六十五歳）

若槻禮次郎全權委員となりて赴く○七月全國大衆黨成る○十一月十四日濱口首相狙擊さる。

●五月四日粕谷義三六十五

四月十四日若槻濱口に代りて首相及び民政黨總裁の任を襲ふ○九月十八日滿洲事變勃發○十二月十三日犬養内閣成立。

●八月二十六日濱口雄幸六十二●十月三十日仙石貢七十五●十一月十一日澁澤榮一九十二●十二月三日花井卓藏六十四

昭和七年（六十六歳）

二月二十日第十八回臨時總選擧に立候補して當選す○七月二十日大橋信吉二女武子を養女とす○十月十八日二女チヨ望月龍と結婚屆出。

一月二十一日政府與黨少數の爲め第六十議會解散○二月二十日第十八回總選擧○二月三月血盟團事件○三月一日滿洲建國○五月十五日兇變起り犬養斃る○鈴木喜三郎政友會總裁となる○五月二十六日齋藤内閣成立○一月二十八日上海事件突發す。

●九月十八日江木翼六十●十二月二十一日山之内一次六十七

昭和八年（六十七歳）

三月二十七日國際聯盟脱退○五月三十一日日支停戰協定成立。

●二月四日泰豐助六十二●四月二十一日長岡外史七十六●七月二十七日武藤信義六十六●十月十五日新渡戸稲造七十二●十二月八日山本權兵衛八十二

昭和九年（六十八歳）

二月十九日政友會内紛表面化の責任をとり議員拜辭を表明す其後各方面の慰留により二十五日辭意撤回す○七月五日岡田内閣への入閣勸請を拒絶す。

四月帝人事件起る○七月八日岡田内閣成立○政友會より床次、山崎、内田入閣政友會三名を除名○十月若槻民政黨總裁辭任、三月一日滿洲國帝制實施。

●二月五日鎌田榮吉七十八●二月十九日伊藤巳代治七十八●三月二十八日岡田良平七十一●三月九日武藤山治六十八●三月二十五日中橋德五郎七十一●五月三十日東郷平八郎八十八

昭和十年（六十九歳）

三月十六日衆議院にて憲政功勞者として表彰さる○五月十日内閣審議會に入る○同日政友會より除名さる○九月十二日遞信大臣に任命さる○九月十三日高橋山崎内田等政友會出身閣僚と新黨問題につき重要協議す○十二月二十三日内田其他十四名の代議士と昭和クラブを組織す。

●七月十二日大石正巳八十一

昭和十一年（七十歳）

二月二十日第十九回總選擧に立候補し當選す○三月九日岡田内閣總辭職につき遞信大臣を辭す。

一月町田忠治民政黨總裁就任○九月八日遞相床次竹二郎逝く○政友會望月水野を除名す○一月二十二日貴族院に於いて美濃部博士の天皇機關説問題化す○三月二十三日北滿鐵道をソ聯より滿洲國へ讓渡す○五月十日内閣審議會官制公布。

一月軍縮會議脱退聲明○一月二十一日國政運用不圓滑に依り第六十八議會解散○二月二十日第十九回臨時總選擧、無産黨大進出○二月二十六日二・二六事件起り高橋是清、齋藤實等斃る○三月九日廣田内閣成立。

●三月十二日内田康哉七十二●三月山本条太郎七十●三月二十七日川崎卓吉六十六

昭和十二年（七十一歳）

（二月十五日鈴木政友會總裁引退を表明す○同月廿八日鳩山、前田、島田、中島の四氏を總裁代行委員とす。）
四月三十日第二十回總選擧に立候補して當選す。
五月二十一日昭和會解散す。
五月近衞文麿に出馬を勸告すと云ふ。

昭和十三年（七十二歳）

二月十一日憲法發布五十年記念祝賀式擧行○一月十一日大本營御前會議に依り對支最高方針決定す○同日厚生省創設○一月十六日政府國民政府を相手にせずとの聲明を發表す○三月二十四日國家總動員法案成立○同廿六日電力國家管理法案成立○二月二日林内閣成立○二月十一日文化勳章制定○五月十四日企劃院開設○六月四日第一次近衞内閣成立○七月七日北支蘆橋溝事件勃發（日支事變發端）○八月八日北京入城○八月十五日渡洋海軍機南京南昌空襲○八月二十五日張家口占領○十月十二日國民精神總動員中央聯盟結成○十月十五日内閣參議設置○十月二十六日大場鎭陷落○十一月五日杭州灣上陸○十一月六日日獨伊防共協定成立○十二月十三日南京陷落。

●二月一日淺野長勳九十六●十二月十四日山本梯二郎六十八●同二十一日馬場鍈一五十九

昭和十四年（七十三歳）

（四月二十八日病床の鈴木政友會總裁四代行委員を罷免し久原三土芳澤の三名を代行委員とす、同く三十日革新同盟派は右三名と三十餘名を除名し中島知久平を政友會總裁に推す、五月十三日鈴木總裁久原房之助を總裁とす）
六月二十一日、政友會中島派の懇請によつて復歸す。

同廿八日南京に中華民國維新政府成立○四月三日朝鮮志願兵制度施行○五月十九日徐州陷落○七月十二日張鼓峯事件○八月十日日ソ停戰協定○十月十二日バイアス灣上陸○十月二十七日武漢三鎭陷落○十二月十八日汪精衞重慶脫出○政友會次期總裁を繞り鳩山中島兩派爭ふ

●十月一日元田肇八十一

一月五日平沼内閣成立○八月獨ソ協定○八月三十日阿部内閣成立○一月七日國民登錄制度公布○二月海南島上陸○五月二十八日ノモンハン事件○六月三日長嶺子事件○七月二日ホロンバイル事件○七月十五日日英東京會談開始、八月二十日決裂○九月一日第一回興亞奉公日○九月四日歐洲戰爭不介入聲明○九月十五日日滿ソ蒙停戰協定成る○十月九日汪精衞新生支那建設聲明○十月二十日價格統制令公布（九一八停止令）

●八月一日大谷尊由五十四●十月二日小橋一太七十

昭和十五年　（七十四歳）

二月十三日内閣參議に任ぜらる○秋歸郷す。

一月十六日米内内閣成立○二月十一日紀元二千六百年紀元節に詔書發せらる○三月三十日中華民國新國民政府成立し南京に遷都す○六月二十日日泰和親條約調印○七月六日贅澤品禁止令公布○七月十六日政友會久原派解消○同二十二日第二次近衞内閣成立○同卅日政友會中島派解消○八月六日民政黨解消○九月廿三日佛印平和進駐○同廿七日日獨伊三國條約締結○十一月十日紀元二千六百年式典、翌日奉祝會擧行○十一月三十日支基本條約調印○十二月十六日大政翼賛會臨時中央協力會議開會。

●二月十九日賴母木桂吉七十四●四月三日藤澤幾之助八十二●六月二十四日鈴木喜三郎七十四●十一月二十四日西園寺公望九十二

昭和十六年　（七十五歳）

一月一日薨去享年七十五歳。

十二月八日米英兩國に對し宣戰の大詔渙發さる。

跋

昭和十六年一月一日、望月圭介翁の長い活動の生涯は此の日を以て閉ぢられた。翁の餘德は、その通夜、茶毘、葬送のつどひにおいて、すでに翁の傳記編纂の意圖を人々の心の中に惹き起こさせた。卽ち翁の生涯を敍し、類まれなるその人格を追慕するよすがとし、併せて青年子女の德性陶冶の絕好の資たらしめんことが考へられたのであつた。かうした多くの人々の意圖は期せずして相合し、同年同月その準備委員會が起こされ、中島知久平、大橋信吉、胎中楠右衞門、名川侃市、佐々木良一、中田謙二、岸田正記、鳥越雅一、野村秀雄、宮澤裕、青木精一、春名成章、大石主計、志田了介、三枝博音（順序不同）の諸氏を以て二月、こゝに望月圭介傳記編纂委員會が結成された。ついで編纂主宰として三枝氏が選ばれ、又編纂員として鳥井博郎、宅間道哉の兩氏が加へられ、編纂所は胎中氏の配慮を通じて、東京日比谷市政會館内の中島氏事務所内に設けられた。

最初まづ傳記編纂の企圖を翁と生前昵懇の諸氏を初め翁の門下及び眷顧を受けられた人々へ通告し、萬端の援助を仰ぐとともに、翁の書翰書軸或は回想所感等、翁の生涯を語るべき諸資料の借覽惠與を求めた。發信先は東京及び郷土廣島が格段に多かつたが、殆ど全國に亘つた。これに應えて直ちに翁追慕の人々より多大の感激を以て或は書翰を或は色紙或は追憶文等、貴重なる資料の貸與寄贈を受けた。一

方更に完璧を期するため故友・知己・門下生等の追憶仰慕の座談會を十數次に亘つて開催し、更に翁と緣故ある諸團體や各個人等を歴訪し、翁の各時期各方面の資料蒐集に努めるとゝもに、廣島淺野圖書館、同文理大圖書館、備後三原圖書館、同尾道圖書館、東京上野帝國圖書館等をも探つて專ら關係資料の充實に努めた。もとよりこれらの中主要な資料となつたものは東京及び廣島の望月家に遺された諸種の記錄と家族近親の談話であつたことはいふまでもない。

然してこれら蒐集資料の處理と傳記敍述の構成には專ら三枝氏が當り、その執筆には三枝鳥井宅間の三氏が各その分野を擔當して着手したが、不幸にも宅間氏が病氣のため退所の已なきに至つたゝめ新に三好一光氏が入所してこれに代つたが、ついで業半ばにして鳥井氏も亦病褥に親しむ處となつたので、更に三好氏がその後を受け、昭和十七年十一月一應脫稿、委員會に於て嚴密なる檢討を經、更に新資料の入手とゝもに幾度かの改訂增加を行ひ昨年秋に至り漸く完了した。

此間、發行所は委員會より交渉の結果、羽田武嗣郎氏の好意によつて、その經營する羽田書店より刊行と決定、更に凸版印刷株式會社の山田三郎太氏、印刷文化協會の鈴木正文氏等の誠意ある斡旋によつて印刷其他諸資材の入手も圓滑に進捗したが、各機關をあげて戰力增强に使用せらるゝ決戰下の今日、時には些かその進行に遲滯を見ることもあつたにも拘らず關係者一同の熱誠によつて、こゝに刊行を見るに至つたことは洵に喜びに堪へぬところである。更に喜びを以て報告したいのは、本傳記のためにその題筌を岡田啓介大將に需めたる處、その快諾を得て、こゝに見らるゝが如き翁の傳記にふさはしい外

觀を備ふるに至つたことである。

こゝに些か本傳記刊行に至るまでの經過を述べて跋とするとゝもに、此間本編纂に寄せられた大方の好意に對し深甚なる感謝を表するものである。

出版會承認あ110255號

昭和十九年十二月三十一日印刷
昭和二十年一月五日發行

（非賣品）

望月圭介傳

編纂者　望月圭介傳刊行會
東京都京橋區京橋一丁目七番地

發行者　山崎武男

印刷者　山田三郎太
東京都板橋區志村町五番地

發行所　株式會社　羽田書店
東京都京橋區京橋一丁目七番地

凸版印刷（東京83）

22.38-1